帰り花

霜　康司

●　配役

役者１　寅次郎　（女優が演じても可）
役者２　高杉
役者３　利助　（女優が演じても可）
役者４　久坂
役者５　亀太郎
役者６　銀
役者７　山縣
大老
役者８　佐久間象山
オランダ
上海
役者９　ペリー
大目付
アメリカ
役者１０　宮太郎
周布
勘定奉行

役者１１　ペリー通訳
町奉行
役者１２　象山の弟子１
牢名主
英提督通訳
役者１３　象山の弟子２
老中
役者１４　山田先生
英国提督
ロシア
役者１５　文
女優　久子

第一幕

<M-1 〝Overture〞「序曲」>

舞台には平台が正方形に敷かれ、中央奥が一段高くなっている。演技はすべてこの平台上で行われる。

舞台前面に高杉と利助が浮かび上がる。音楽。舞台奥に肖像画のような男（寅次郎）の姿が見える。実際は枠の中に男がいるのだが、照明の当たり具合と、男が動かないことで肖像画か写真のように見える。

利助　先生の肖像画ですね。

高杉　よくできている。

利助　今にも「学問しましょう」なんて言いだしそうですね。

高杉　ああ。不思議だな。こうしてると、十年前に戻れそうだ。

利助　亀太郎の入魂の作です。あいつも京都で死にました。

高杉　塾生の半分は黄泉（よみ）の国だ。遅れても遅れても、君たちに誓った言葉を俺は忘れはしない。

寅次郎　（書物を音読して）*夫(そ)れ、混元既に凝りて、気象未(いま)だ効(あらは)れず。名も無く為(わざ)も無し。

高杉　そもそも、渾沌たる気が密集して、宇宙には命も物質もなかった。名もなく動きも無かった。

寅次郎　しかし、天地が初めて分れ、三人の神が天地創造を始め、男と女の神、伊邪那岐、伊邪那美が万物の祖となった。

利助　先生。

高杉　まさかその神話の本に救われるとは思ってもいませんでした。

寅次郎　どうして鎧を着ているのです？

高杉　我々は奇兵隊を率いて立ち上がります。そのご挨拶に伺いました。

寅次郎　奇兵隊とはもしやあの？

高杉　そうです。先生が構想された軍隊です。と言ってもこちらはほんの数十、反対派は数千います。

利助　加えて幕府軍も一五万ばかし。

寅次郎　絶望的ですね。

高杉　はい。

寅次郎　御武運を祈ります。

掛け軸を手にした亀太郎が登場。

亀太郎　そっくりだろ？

高杉　亀太郎。

亀太郎　俺は何のために生きていたのか、ようやくわかったよ。生きているときには、京都や山口を飛び回り、血なまぐさい話に明け暮れたが、今にして思えば、俺はこの絵を描くために生まれてきたのだと思う。

利助　確かに、先生のお姿を後世に伝えたのは、お前のこの肖像画だ。

高杉　俺も死んだら都々逸（どどいつ）だけが残るのかな。

亀太郎　お前は違う。もっと大きなことをしでかしてもらわないとな。そのためにここに来たんだろ？

高杉　ああ。しかし、これから血の雨が降る。できることなら、今一度、先生にお伺いをたてたいものだ。

亀太郎　いっそ絵の中に入ってみるか？

高杉　そんなことができるのか？

亀太郎　（客席に見せないように二人に掛け軸を見せる）どうだ？　覚えているか？

利助　あ、これはあのときの！

亀太郎　そうだ。心ゆくまで味わうがいい。

亀太郎が投げるようにして掛け軸を広げると同時に音楽。奥の方に塾が浮かび上がる。

<M-2 "The World Over"「広い世界」>

寅次郎　♪広い世界はどこにある
久坂　ロンドン
亀太郎　北京
久坂　エルサレム
寅次郎　この世界見渡すなら
ここが柱とみたてよう
亀太郎　いつでもない時に
久坂　どこでもない所に
寅次郎　見つけよう青い空

舞台全体が明るくなり、文（ふみ）、久坂が掃除、亀太郎が絵筆を持ってい

る。

亀太郎　先生、動かないで。

寅次郎　ああそうか、すまんすまん。

亀太郎　先生、一度でいいから、ちゃんと絵を描かせてください。

寅次郎　わかってるわかってる。

文　無駄ですよ。兄上にじっとさせておくなんて。

亀太郎　なぜです？

文　だって兄上はいつも旅の空。東北、熊本、長崎、江戸に佐渡。今だってお上の目がなければ、またどこかに飛んでいきたくて、うずうずしてるんでしょ？

久坂　確かに萩の御城下で先生ほどの旅人はいませんね。

高杉と利助が近寄る。

利助　こんにちは。

文　どちらさまでしょう？

利助　吉田寅次郎先生はいらっしゃいますか。

久坂　おお、利助に高杉。ついに来たな。

高杉　ああ。

久坂　先生、これが申し上げておりました高杉です。

高杉　高杉です。寅次郎先生に教えを請いに参りました。

寅次郎　大歓迎です。一緒に学びましょう。

久坂　こちらが伊藤利助君です。

利助　よろしくお願いいたします。

寅次郎　よろしく。

久坂　こちらが先生の妹君、文さんだ。

高杉　どうも。

文　よろしくお願いします。

寅次郎　（壁に貼ってある紙を指さし）これは士規七則といって、塾生の心得です。よく読んでおいてください。

利助　はい。

久坂　高杉と利助は幼なじみで、私と高杉は藩の学校明倫館で一緒です。

寅次郎　そうでしたか。

利助　こちらでは藩校とは違って生きた学問を教えていただけると聞きました。

寅次郎　学んだことを実際に生かせなければ学ぶ意味がありませんからね。

高杉　（士規七則を見ながら、にやにやして）これはこれは。

寅次郎　どうしました？

高杉　いえ、別に。ふふ。

寅次郎　なぜ笑うのです？

高杉　これは失礼。でも怒るよりましでしょう？

久坂　なんだと！　侮辱する気か？

高杉　侮辱するつもりはないが、失礼ながら当り前のことばかり書いてある。人と獣の違いを知れとか、親孝行しろとか、忠義を重んじろとか、これじゃそこらの学校と同じだ。こんなものをありがたがる奴はどうかしてる。

利助　高杉さん、言い過ぎじゃありませんか。

高杉　ふん。百姓のお前に忠義がわかるか。

久坂　お前、喧嘩を売りに来たのか。

高杉　俺は密航を企てた兵学者の吉田先生が、久坂が言うほどの人物か見極めに来た。そんなに偉い先生ならば、なぜ密航に失敗したのか、伺おうと思ったのだ。

久坂　貴様、言わせておけば。

寅次郎　久坂さん、いいのです。次は必ず成功させますから。

利助　次って、懲りずにまたやるつもりですか？

寅次郎　当然です。西洋に行って学ばないといけませんから。

高杉　しかし重ねて国禁を犯せば、今度は確実に死罪、お家は取りつぶしだ。気は確かですか？

寅次郎　確かでないといいのですが。

高杉　家や藩などどうなってもいいというわけですか？

寅次郎　いいえ、反対です。僕が外国に行かなければ、家族や象山先生が怒り悲しむでしょう。

高杉　しかし、現にあなたの父上は役職を解かれ、象山先生も幽閉されたと聞きます。それでも懲りないとは、家をつぶしたいとしか思えない。

寅次郎　何もしなければこの国は無くなります。それで家が守れますか。

高杉　この国が無くなる？　そんな馬鹿な。

寅次郎　萩にいては信じられないのも無理はない。しかしもはや横浜、長崎、琉球は西洋人に譲り渡したようなものです。彼らはすでに一等地に住まいを建て、日本人をこき使っています。

利助　なぜそんなことになっているのですか。

寅次郎　あなた方はアヘン戦争のことは聞いていますか。

利助　いいえ。

寅次郎　それじゃあ萩におられる山田先生を御存知ですか？

高杉　いいえ。

寅次郎　それは残念。あれは十数年前、山田先生は世界地図を使って、我が国を取り巻く情勢を教えてくださいました。ちょっとおもしろい教え方ですが、あなたたちもご覧になりますか？

利助　山田先生を見せていただけるのですか？

寅次郎　もちろん。

銅鑼の音と共に暗転。明るくなると山田先生が銅鑼を持って立っている。人形劇セットが中央にあり、その観客は若い頃の寅次郎。人形劇の書き割りは中国風の室内。宮太郎がお茶を飲んでいる英将軍を、山田先生が中国女を操る。

<M-3　"Chinese Tea Situation"「中国茶の事情」>

（『フレール・ジャック』の替え歌で）

英将軍　♪ピータン、ワンタン

マーボー、タンメン

タンタン麺、ホイコーロー
金利はまだか　飲茶はまだか
香港　上海

中国女　（輪唱して）ピータン、ワンタン
マーボー、タンメン
タンタン麺、ホイコーロー
お代はまだか　無銭飲食
香港　上海

寅次郎　（輪唱して）ピータン、ワンタン
マーボー、タンメン
タンタン麺、ホイコーロー
砲艦外交　正義はどこだ
香港　上海

英将軍　うまい！　ここのお茶は最高だ。

中国女　中国四千年の味ですから。

英将軍　お代わり。

中国女　もう随分お飲みになっておられますが、失礼ながらお金はお持ちです

か？

英将軍　大英帝国に金など不要だ。

中国女　やだ、無銭飲食？

英将軍　その代わり、いい薬をやろう。これを吸うと気分よくなるぞ。

中国女　それはアヘンでしょ。そんなもの吸ったらラリパッパになるじゃない。

英将軍　そう言わずに一度くらいやってみろよ。気持ちよくなれるぜ。

中国女　何すんのよ！

英将軍　あ！　落としたじゃねえか。こいつは上物なんだぞ、どうしてくれる。

中国女　いいから帰っとくれ。

英将軍　そうはいくか。（銃を出して）おとなしく言うことを聞け！

中国女　何よ、何が欲しいの？

英将軍　俺は香港のお茶が気に入った。ここに間借りして住んでやるからじゃんじゃん持ってこい。

中国女　間借り？

英将軍　そうだ。難しい言葉で言うと租借って奴だ。いいか、この線からこっちは、犬と中国人は入るべからずだ。

中国女　どれぐらい居座るつもり？

英将軍　ほんの百年だ。賠償金は一二〇〇万両にまけておいてやろう。

中国女　金まで取る気？

英将軍　分割にしてやる。金利は一〇％だ。

中国女　どこまで弱い者をいじめたら気が済むんだ？

英将軍　悪く思うな。所詮この世は弱肉強食。悪の枢軸との戦いを開始するぞ。

山田先生銅鑼を鳴らし、宮太郎が人形劇セットを片付ける。

寅次郎　（拍手して）素晴らしい。とてもよくわかりました。つまりイギリスは中国からお茶を買い、アヘンを売りつけたのですね？

山田先生　そうだ。もちろんアヘンは麻薬だから、中国はアヘンにチャイナら、と思ったら、イギリスが攻め込んできた。

寅次郎　それにしても中国のような大国が屈服するなんて信じ難いです。

山田先生　中国だけじゃない。世界中だよ。これを見なさい。

ホリゾント幕に世界地図が浮かび上がる。世界地図はおおむね現実と似ているが、単純化されていて、特に日本の辺りはやや現実感がない。

寅次郎　世界地図ですね。

宮太郎　我が国はどこですか。

山田先生　ここだ。

宮太郎　小さいですねえ。

山田先生　そして長州藩はそのまた端っこのここら辺だ。そしてここがイギリスだ。

寅次郎　小さいですね。我が国と変わらないくらいだ。

山田先生　ところがイギリスの植民地に色を塗ってみると。

地図のインド、オーストラリア、アフリカ東部の辺りが赤くなる。

宮太郎　おお、インドが！

山田先生　それからフランスの植民地。

世界地図のベトナム、アフリカ西部が青くなる。

山田先生　スペイン、オランダなど西洋諸国とその植民地をすべて塗るとこうなる。

世界地図の大部分が色分けされている。

寅次郎　なんと！　アジアだけじゃなく、世界は西洋人のものですか？

山田先生　すでに半分はそうだ。彼らのねらいは交易と称して商品を奪い去ることにある。

宮太郎　商品といいますと？

山田先生　金、銀、絹、米、それに人間だ。

宮太郎　人間もですか？

山田先生　ああ。彼らは奴隷として人も売る。

宮太郎　野蛮ですね。

山田先生　野蛮だ、茶番だ、チカンだ！　しかし彼らはめっぽう強い。

寅次郎　もし今彼らが攻めてきたらどうなります？

山田先生　残念ながら、百戦百敗、食材一杯、冷や奴で一杯だ。

寅次郎　彼らの軍事力の秘密を探る必要がありますね。

山田先生　その通り。だからまず長崎へ行き、オランダの軍艦を見てきなさい。

寅次郎　では早速行って参ります。

宮太郎　ちょっと待て。そう簡単に長崎まで行けないぞ。通行手形とか藩の許可書とか持ってるのか？

寅次郎　そんなものは要りません。僕は脱藩しますから。

宮太郎　脱藩？　藩を抜けるのか？

寅次郎　はい。今の先生の話で僕は目が覚めました。必要なときに必要な場所に行くためには藩を抜けるしかありません。

宮太郎　脱藩がどういう事かわかってるのか？　下手をすれば切腹ものだぞ。

寅次郎　国が危機の時に、一つの藩に囚われてはいけません。

山田先生　偉い！　よく言った。

宮太郎　お前、落ち着いてよく考えろ。脱藩したら長州に居場所がなくなるだけじゃない。お前の父上もお咎めを受けることになる。

寅次郎　父上も叔父も脱藩しろといってます。

宮太郎　お前んちはどうなってんだ？　第一、金はどうする？　藩から給料をもらってるんだろ？

寅次郎　友達に借金します。

山田先生　偉い！　その意気だ！

宮太郎　そんな無謀な。

寅次郎　無謀でなければこの危機は乗り切れません。西洋に打ち勝つには地球をひっくり返すほどの覚悟が要ります。先生、僕に何ができるか教えてください。

山田先生　君は言葉で山を動かしなさい。

寅次郎　どういうことです？

山田先生　人は言葉で動き、言葉で死ぬ。西洋人が植民地にあんな無茶ができるのは、彼らが自分たちの宗教、文化、政治、経済に自信を持っているからだ。言い換えれば彼らは自分の言葉を信じている。まずは我々もどんな言葉を信じられるか、それを考えるのだ。

寅次郎　それではこれより僕は吟遊詩人となって諸国の学者を訪ねてきます。

山田先生　よし。これは餞別だ。（風呂敷を渡す）オランダの書物です。道中お読みなさい。

寅次郎　ありがとうございます。

舞台前暗くなり、音楽と共に舞台奥が明るくなる。
そこは象山先生の家。象山は背が高く、あごひげをたっぷり蓄えており、まるでテント芝居から抜け出てきたようにカメラや電信機などを体に結びつけている。

<M-4　"Silent World"　「沈黙の世界」>

象山　♪望遠鏡で世界を見れば
世界に見られる目が縮む
モールス信号叩いてみれば
受信機のない世界が黙る
ガラスコップに大砲かざし
カメラ片手にオランダ語
あらゆる難問解いて見せても
誰が知ろうかその世界

歌が終わると寅次郎登場。

寅次郎　（ひれ伏して）佐久間象山先生、吉田寅次郎と申します。どうか入門をお許しください。

象山　ああ君だな？　昨日詩をおいていったのは。

寅次郎　はい。つたないもので申し訳ありません。

象山　いや、なかなかいい詩だったよ。今のような時代には芸術が大切だからね。

寅次郎　そうなんですか？

象山　だってよく言うじゃないか、芸術はバクマツだ！

寅次郎　はあ。

象山　それにしてもすごい荷物だね？

寅次郎　（さらに大きくなった風呂敷積みを抱えて）はい、上方で本を仕入れまして。

象山　ほう。どんな本かね？

寅次郎　西洋の兵学の翻訳本です。

象山　それは大砲の作り方だな。作ってみたか？

寅次郎　いえ。

象山　そのまま作ったらとんでもないことになるぞ。

寅次郎　そうなんですか？

象山　翻訳で気をつけなければならんのは度量衡だ。メートル法、ヤード・ポンド法などいろいろあるが、それを間違えている翻訳が多くてな。

寅次郎　佐久間先生は大砲を作られたのですか。

象山　日本初の後方装填式だ。その方が装填の手間が少なくて実戦的なんだ。

寅次郎　すばらしい。見せていただけますか？

象山　残念ながら、土の中だ。

寅次郎　土の中とは？

象山　作った大砲を埋めろと命令されたんだ。

寅次郎　最新式の大砲をなんで埋めなきゃならないんですか。

象山　大砲を江戸に向けられるのではないかと警戒する阿呆がいたり、砲兵隊の経費を惜しむ奴がいたりしたんだ。

寅次郎　そんなことで国防を放棄するのですか。

象山　役人達はいつもそうだ。私はすでに十年前に、オランダから軍艦を買い入れ、優秀な人材を海外に留学させ、海軍を整えようと幕府に提案した。それができてれば、今頃大騒ぎせずにすんだのにな。

寅次郎　（土下座して）先生、私を弟子にしてください。

象山　チーズ！

象山、カメラで寅次郎の写真を撮る。光るストロボ。

寅次郎　なんですか？

象山　写真を撮らせてもらったよ。ほれ、これが君の顔だ。

寅次郎　すごい。

象山　ところで今から出かけるんだが、君も一緒にどうだ？

寅次郎　どちらに行かれるのでしょうか？

象山　アメリカの艦隊を見に行く。昨夜、薩摩からの早飛脚でアメリカが琉球を従えたと報告があった。

寅次郎　琉球で戦になったのですか？

象山　戦にもならんかったようだ。四隻の戦艦がやってきて、蒸気船の石炭庫を作り、連れてきた豚や鶏をあちこちに放してるそうだ。

寅次郎　豚や鶏？　なんですか、それ？

象山　放し飼いにしていずれ食べる気らしい。おまけにアメリカ軍は琉球の住民にカボチャやら小麦などの種と一緒に、鋤や鍬も配っているらしい。

寅次郎　カボチャ？　もしかして、我が国は農業もない未開の土地だと思われてるって事でしょうか？

象山　そうだろうな。

寅次郎　なんという屈辱！

象山　にこやかに種を配りながら、逆らったら大砲をぶっ放すぞと脅すから、住民も適当に合わせてるんだそうだ。

寅次郎　嘆かわしい。

象山　そしてその四隻の戦艦は江戸を目指すと言って、毎日軍事演習を繰り返していたという。

寅次郎　江戸にくるのですか？

象山　うん。長崎に行けと言っても聞く気がないらしい。今までのような応対の仕方ではとても引き下がりそうにない。わしの計算だと、あと数日で浦賀に達するはずだ。君も行くか？

寅次郎　行きます。江戸中がカボチャ畑になる前に。

暗転。音楽。戦艦ミシシッピの船室。ペリー提督と通訳が歌う。

<M-5 "Pumpkin Pie"　「パンプキン・パイ」>

ペリー　♪パンプキンパイ

通訳　パンプキンパイ

ペリー　おいしく焼こう

二人　パンプキンパイ

ペリー　パンプキンパイ

通訳　パンプキンパイ

ペリー　おいしく焼こう

二人　パンプキンパイ

タップダンス。

ペリー　チキン
通訳　ポーク
ペリー　ライス
通訳　ブレッド
二人　パンプキンパイ
二人　パンプキンパイ
ペリー　でも一番おいしい
二人　パンプキンパイ

間奏

ペリー　チキン
通訳　ポーク
ペリー　ライス
通訳　ブレッド
二人　パンプキンパイ

二人　パンプキンパイ

ペリー　でも一番おいしい

パンプキン

パンプキン　パンプキン

パンプキンパイ

音楽終わる。

通訳　やはり日本にも農業はあったでしょ？

ペリー　そうだったな。カボチャなんか、何百年も前に伝来してたみたいだ。

通訳　それから米と脱穀機、これもすでにありましたね。

ペリー　まあ失敗もあるさ。それにしても日本人というのは酒好きだなあ。

通訳　いえ、あれは日本の風習で、注がれた酒は飲み干すことになってますので。

ペリー　なるほど。しかし、相手の杯が空になったら酒を注ぐのも礼儀だろう。

通訳　もちろん。そして注がれたからには飲み干すのも礼儀なのです。

ペリー　じゃあ終わらないだろ？

通訳　ええ。永久に飲み続けます。

ペリー　恐ろしい風習だな。それに大統領の国書を渡す時には、あいつらみんな黙って目も合わさんかったのに、儀式が終わると人が変わったみたいだった。

通訳　銃を見せろとか船を見せろとか言って、勝手に上がり込んできましたね。

ペリー　仕方なしに宴会に招待してやったら、あの陽気さだ。

通訳　そういえば妙になれなれしい同心がひとりいましたね。提督の首に手を回して「日本もアメリカも心は一つ」とか叫んでましたね。

ペリー　酔っぱらいは叶わんよ。

通訳　まあ親善外交にはなったんじゃないですか。帰りには全員両手に持てるだけのワインを抱えてましたからね。

ペリー　高級ワインだったんだがな。

通訳　なんか、緊張感が一気に吹き飛びましたね？

ペリー　このまま私たちがアメリカに帰ったら、あいつら宴会のことしか覚えてないだろうな。

通訳　そうかもしれません。

ペリー　よし、今から江戸に向かう。

通訳　え？　この深夜にですか？

ペリー　そうだ。このままいい人だ、なんて思われては困る。帰り際に奴らを

びびらして、来年確実に条約締結できるようにしておこう。

通訳　では、空砲を打ち鳴らしますか？

ペリー　派手にやってくれ。

通訳　アイアイサー！

溶暗。大砲の空砲が遠く何度もしつこいほど聞こえる。
明かりがつくと塾の一室。魚屋の銀が弟子入りに来ている。

寅次郎　（大砲の音をまねて）バーン、バーン。浜辺中に空砲が鳴り響いて、みんな家財道具を持って逃げまどっておりました。

全員　ほー。

銀　お取り込み中おじゃまします。あの、寅次郎先生はいらっしゃいますか？

文　どちら様でしょうか？

銀　すみません。講義中でしたらそちらで待たせていただきます。

寅次郎　いえ、いいですよ。ちょうど終わりましたから。何かご用で？

銀　魚屋の銀と申します。寅次郎先生に学問を教えて頂きたくやって参りました。どうか弟子にしてください。

寅次郎　一緒に学んでくれる方は大歓迎です。こちらへどうぞ。

銀　ありがとうございます。これは今朝取れたての魚です。皆さんでどうぞ。

寅次郎　ありがとう。皆で頂きましょう。でも次からは気を使わないでくださいね。

銀　はい。それで謝礼の件ですが……

寅次郎　お金は必要ありません。僕たちは一緒に学問しているだけです。良いですね？

銀　は、はい。

文　あ、お茶を入れてきます。ごめんなさい、気が利かなくて。

寅次郎　銀ちゃんはどうして学問しようと思ったのです？

銀　商いのためです。ちゃんと計算できないと、まともな取引ができませんから。

寅次郎　素晴らしい。信用には数字の裏付けが必要ですからね。まだ早いのでこれだけですが、塾生は全部で五、六十人います。こちらが久坂さん、塾生きっての秀才で人望もあつく、酒も強い。今は医者をしていますが、きっと我が国の柱になってくれる人物です。

久坂　そんなに褒められるとやりにくいです。

銀　よろしくお願いします。

久坂　よろしく。

寅次郎　かしこまらなくていいですよ。塾では地位も身分もありません。皆兄弟のように接してください。

銀　はい。

利助　久坂さんは幼い頃に親兄弟に死に別れ、苦学されてますから、何かとよい相談相手になってくれます。

寅次郎　こちらが高杉さん。久坂さんと並ぶ秀才ですが、暴れ牛とあだ名され、何をしでかすかわからないところがあります。

高杉　先生、そのあだ名を御存知でしたか？

寅次郎　もちろんです。懐に爆弾でも隠し持っているんじゃないかという噂です。

高杉　そんな物持ち歩いてませんよ。（利助に）お前だな？

寅次郎　噂ですよ。気にしないで。でもこういう人が戦のときに頼りになるんです。

高杉　よろしくな。

銀　よろしくお願いします。

寅次郎　そしてこちらが伊藤利助君。最近めきめきと学問に目覚め、いずれ立派な政治家になるでしょう。

高杉　こう見えて女と商売には手が早いから、用心しろよ。

利助　また余計なことを。

銀　よろしくお願いいたします。

利助　こちらこそ。

寅次郎　あそこの奥で絵を描いているのが亀太郎君。彼の絵は素晴らしいですよ。

久坂　亀太郎は重臣たちの肖像画を描いて回りながら、藩の動きを偵察してくる貴重な情報源でもある。

銀　よろしくお願いいたします。

亀太郎　（筆を持ったまま）よろしく。

文　お茶です。どうぞ。

銀　これはどうも。

寅次郎　妹の文です。身の回りのことで世話を焼いてくれてます。

銀　よろしくお願いします。

文　よろしく。

銀　ありがとうございます。

寅次郎　二階が僕の書斎兼印刷室になっていますから、用があれば声をかけてください。本棚の本は自由に使って良いです。読み書きそろばんの初歩

から我が国の歴史書、西洋事情の翻訳本など、結構そろってます。

久坂　これは『飛耳長目』といって、遠くから集めた情報だ。

銀　てえと？

久坂　耳を飛ばし、目を長くして集めた、世界情勢や幕府の内情だ。

利助　先生のお知り合いから、手紙が寄せられてくるんだ。

高杉　たとえば中国の太平天国の乱の様子までわかるぞ。

銀　な、なんですか、それ？

利助　高杉さん、いきなり無理ですよ。（銀に）心配しなくてもすぐわかるようになるから。今、海の向こうじゃ大変なんだ。

銀　はあ。

利助　税金が高くて庶民は大変らしい。それもアヘン戦争の賠償金を西洋に払うためだ。

銀　西洋人はいい加減にせいようなんてね。……申し訳ありません。御政道のことは魚屋には難しくていけません。やっぱり、あっしは読み書きそろばんを教えていただければそれでよろしいんで。

久坂　しかし政治は魚とも関係あるんだよ。

銀　そうなんですか？

久坂　もちろん。たとえば魚の値段は誰が決める？

銀　それは俺たち売り手です。

久坂　ところがもし外国人が決めるようになったらどう思う？

銀　まさか。ご冗談でしょ？

高杉　いや、十分あり得る。幕府が結んだ通商条約のせいでな。

銀　そいつがワルですか。

久坂　いや、通商条約は人じゃない。一種の取り決めで、西洋人は我が国では盗みをはたらいても人を殺しても捕まらないって約束だ。

利助　おまけに我が国には関税自主権もないから、大砲と金を持っている西洋人が、魚の値段も決めることになる。

銀　何でそんな取り決めをしたんですか？

高杉　黒船が怖いからだよ。

銀　黒船がワルなんですね！

久坂　先生、銀ちゃんにもわかるように、さっきの話の続きを聞かせてやってください。

寅次郎　いいですよ。どこまで話しました？

久坂　ペリーが浦賀に現れて、和親条約の締結を迫り、一年後にまた来ると予告して、空砲をならし去っていったところまでです。

寅次郎　ああ、そうだった。その次の年、またペリーが三浦半島にやって来ま

した。今度は浦賀よりもさらに江戸近く、横浜まで船を進めてきた。これからの話はペリーが幕府と和親条約を結ぶ海岸でのことです。

塾と寅次郎たちは暗くなる。

波の音。象山と弟子1，弟子2が望遠鏡をのぞいて、海の方を見ている。

弟子1　（海を眺めている）ここから五百メートルほどありましょうか？

象山　いや。おそらく二キロはある。

弟子2　二キロ？

弟子1　そんなに離れてこの大きさということは……あの船はそんなにでかいのですか？

象山　蒸気船の全長は八〇メートル、帆船が五〇メートルだ。

弟子2　二キロですとこちらから撃っても当たりませんね。

象山　当たらんな。砲台からの射程距離はせいぜい一・七キロだ。奴らそれを知ってるんだろう。

弟子2　それにしてもなぜ今頃現れたんでしょうか？　奴らがこの前来てからまだ半年です。約束までまだ半年あるんじゃないですか。

象山　そうだな。何か事情があってアメリカも慌てているのだろう。

寅次郎走り寄ってくる。

寅次郎　先生、ご無沙汰でございます。

象山　半年ぶりじゃないか。しばらく顔を見なかったな。

寅次郎　はい、小林さんに、勝さんもお元気そうで何よりです。

象山　君がいない間に大変なことになっている。

寅次郎　昨年の四隻が、今年は七隻になっていますね。

象山　見事な船だ。またミシシッピ号が来ている。

寅次郎　カノン砲ですね？

象山　二四ポンドのな。射程距離は三キロだ。

寅次郎　それじゃあ十分海の上から江戸城を撃てますね。

弟子２　奴らは幕府に白旗を渡し、戦争が嫌ならこれを掲げよと言ったそうです。

弟子１　なんたる屈辱。

象山　まあ白旗の真偽はわからんが、奴らに戦う気はない。

弟子２　そうでしょうか。

象山　すでに琉球はアメリカの港のようなものだ。勝手に倉庫を作って、石炭や食料も補充している。あいつらはすでに勝っているんだ。

物々しい格好の侍たちが出てくる。

侍１　ここらがいいだろう。陣幕をはれ。

侍たち、幕を張る。まるで戦国時代のような陣地である。大砲の音。

侍１　（驚いて）うわ。

侍２　また空砲です。

侍１　ここは、危なそうだな。

侍２　大砲がこちらをにらんでいます。

侍１　よし、もう少しあっちに行こう。

侍２　そうですね、その方がよろしいかもしれません。

侍１　あっちだ。行くぞ。

侍たち、あわてて退場。

寅次郎　今のは何をしてるんでしょう？

象山　あれが我が国最新鋭の陸軍だ。

弟子１　え？

弟子２　頼りなさそうですね。

象山　何をしていいかわからないんだ。

寅次郎　あの幕はなんですか？

象山　古式ゆかしい陣幕じゃ。昔は指揮官を守るとか何か意味があったんだろうが、今じゃここを狙ってくださいって的を作ってるようなもんだ。

（海を見やって）あっちもひどいなあ。

寅次郎　四、五人乗りの小船がたくさん出ておりますね。

象山　あれが彦根藩の最新の海軍だ。見ろ。蒸気船に向かってなにやら叫んでいるのが浦賀の奉行だ。

弟子１　ちっちゃい船ですね。

象山　口惜しいのう。わしの最新式の大砲さえあれば品川の御殿山に並べて、返り討ちにすることだってできたんだ。

弟子２　しかしあれをご覧ください。船は小さくても気概は負けていません。黒船を取り囲んでいます。

寅次郎　（耳を澄まして）おお、勇気を振り絞って、空砲をやめろと言ってますね。

空砲の音が何度も聞こえる。

弟子１　（望遠鏡をのぞいて）あら、蜘蛛の子を散らすようです。

弟子２　気概だけだったようですね。

寅次郎　あそこをご覧ください。奴ら勝手に測量を始めています。あんなことされて、何で黙って帰ってくるんですか！

弟子１　（望遠鏡をのぞきながら）あ！　あっちの海岸ではすでにアメリカ兵が上陸しています。

弟子２　上陸して何をやってるんだ？

弟子１　日本人の娘たちと話をしているようです。

弟子２　話？

弟子１　いや、今こんなふうに腰に手を回しました。

弟子２　どうやらナンパしているようですね。

寅次郎　なんだと？

弟子１　しかも、モテモテです。

象山　許せん！

象山の目が怒りに燃えている。

象山　こうなったら実力行使だ。奴らが勝手な振る舞いをするなら、こっちも武力で対抗するしかない。

弟子１　しかし黒船で海から江戸を攻撃されたらどうなります？

象山　もちろん江戸は火の海だ。

弟子１　ええ？　それなら戦争は避けないと。

象山　そう思ったら奴らの思う壺だ。

弟子１　どういうことです？

象山　奴らに戦う気はない。江戸を破壊したってなんの得もない。

弟子１　ただの脅しだとおっしゃるのですか。

象山　そうだ。そのことを教えるためにわしは五八通目の上申書を書いた。

弟子１　そこにはなんと書かれました？

象山　このままでは武士の名折れ、江戸が焦土になっても徹底的に戦え、と。

弟子１　勝算もないのにですか？

象山　なくても戦わなきゃいかん時があるのだ。敵が戦艦なら、こっちは風船

爆弾でも作ればよい。

弟子２　風船爆弾とは？

象山　風船に爆弾をつけて、ワシントンまで飛ばすんだ。

弟子２　すばらしい！　それ、いけるんじゃないですか？

象山　バカモン！　いけるわけないだろ。

弟子２　自分で言ったくせに！

象山　何度も言うようにこれは完全な負け戦だ。しかしだからといって戦を避けているようでは外国になめられるし、国内の変革もできない。アメリカに負ければ嫌でも目が覚める。

弟子２　先生、もう少し冷静になられた方が……。

象山　わしは冷静だ！　奴らは海戦しか考えておらんから、あらかじめ避難していれば、人的被害はほとんどでない。大事なことは勝ち負けではなく、脅しに屈する国民ではないと知らしめることだ。一度脅しに屈してしまったら、この先どこまでも折れることになる。

寅次郎　攘夷の気概を持たないで開国すれば植民地になるということですか。

象山　そうだ。さすが寅次郎君、よくわかってくれた。

寅次郎　確かに戦って負ければ、諸藩の目も覚めるでしょう。

また侍たちが幕を持ってあわただしく出てくる。

侍１　ここでどうだ？

侍２　いえ、ここはさきほど撤収いたしたところです。

侍１　ではどこならよい？

侍２　恐れながら、あの大砲ですと、どこにいても一撃です。

侍１　仕方がない。お殿様を危ない目に遭わせるわけには行かぬ。山の向こうに陣を張ろう。

侍２　しかしそれでは陣を張ったことが敵にも味方にもわかりませんが。

侍１　かまわん。張ることが大事じゃ。

空砲が何発も続く。侍たち、退場。

寅次郎　絶望的ですね。

象山　どうやら戦にさえならんようだな。

弟子１　それにしてもやたらと空砲が多いな。

弟子２　なんでもワシントンの誕生日の祝砲で、大砲一門につき一六発の空砲を撃つそうだ。

弟子１　ということは一五〇門あるから、全部で二四〇〇発。二四〇〇回脅す気か。

弟子２　畜生。どうにかならんのか？

弟子１　それには導火線でもどうかせんとな。

象山　バカモン！　大砲に導火線はない。

弟子１　すみません。

寅次郎　先生、人の死に場所はどこにあるのでしょうか。

象山　何だ？　何か思うところがありそうだな。

寅次郎　はい。命をかけようかと思うことがございます。

象山　ほう。話を聞こうじゃないか。

寅次郎　去年六月ペリーの艦隊を見た後、僕は長崎に行っておりました。

象山　長崎と言えばロシアのプチャーチンか？

寅次郎　さすが先生、お見通しですね。ロシア艦隊を追って長崎に向かったのですが、数日違いで逃してしまいました。

象山　そして今度はアメリカ艦隊を追って下田か。何をたくらんでいる？

寅次郎　幕府が留学を許可しないなら、勝手に行くより致し方ないと思いまして。

弟子１　勝手に行くとはどういう事です？

寅次郎　あの黒船に乗せてもらいます。
弟子２　気は確かですか？
寅次郎　確かでないといいのですが。
弟子２　なんと？

空砲。音楽。

<M-6　"Who's in the Right?"　「正しいのは誰？」>

寅次郎　僕は狂人になりたい。さもないと現実に押しつぶされる。
♪海を渡れば　世界はすぐそこ
回り回って　世界を見たい
弟子１　外国に行くのは御法度だ。ばれたら死罪だぞ。
寅次郎　覚悟の上
弟子１　英語は？
寅次郎　できるわけなく
弟子２　アメリカに知り合いは？
寅次郎　いるわけなく

弟子１　旅費は？
寅次郎　あるわけもなし
弟子１　♪計画も
弟子２　♪なく
弟子１　♪ためらいも
弟子２　♪ない
弟子１　♪見込みは
弟子２　♪小さく
弟子１　♪言うことは
弟子２　♪でかい
弟子二人　♪あてもないのに
寅次郎　♪夢がふくらむ
見ず知らずの国に
なぜ憧れる
この身果てても
世界を見たい
弟子２　駄目だ駄目だ。そんなんじゃ、アメリカ兵に殺されにゆくようなものだ。

寅次郎　アメリカは人道を振りかざして我が国を非難しています。曰く、日本は他国の難破船を救わず、漂流民を拘禁する悪の帝国であると。

弟子１　それは本当か？

弟子２　馬鹿な。事実誤認だ。

曲調が変わる。

寅次郎　♪正しいのは誰？

弟子１　正しいのは彼？

寅次郎　♪正しいのは誰？

弟子２　正しいのは俺？

寅次郎　♪進んでいるのはどこ？

弟子１　アメリカ？

弟子２　（弟子１と同時に）フランス？

寅次郎　♪進んでいるのはどこ？

弟子１　イギリス？

弟子２　（弟子１と同時に）オランダ？

寅次郎　♪正しいのは誰？

弟子１　幕府ではない
寅次郎　♪正しいのは誰？
弟子２　京都でもない
寅次郎　♪進んでいるのはどこ？
弟子１　アメリカ
弟子２　イギリス
寅次郎　♪敵は誰？
弟子１　イギリス　アメリカ　オランダ　スペイン
弟子２　（弟子１と同時に）ロシア　プロイセン　フランス　ハンガリー
寅次郎　♪未来は誰の手に？
弟子２　わかった。我が国に勝ち目はない。
弟子１　残念ながら、力の差は歴然。このままでは我が国は滅びる。
寅次郎　そうとも限りません。確かに科学技術は負けていても、彼らがすべてにおいて優れているわけではありません。僕らが知るべきは本当の彼らの姿、西洋文化の本質です。私はそれを知りたいのです。
♪何を見て
何を学び
何を捨て

何を守るか

弟子１　♪正しいのは誰？

弟子２　♪アメリカではない

弟子１　♪正しいのは誰？

弟子２　♪幕府でもない

寅次郎　♪敵は誰？

三人　♪未来は誰の手に？

間奏。踊り。

寅次郎　♪それを知るには
それを学ぶには

象山　行くしかない！　さすが寅次郎君だ。わしでもそこまで考えなかった。

寅次郎　賛成してくださいますか？

象山　もちろんだ。未だ一人としてこちらから外国の事情を探りに行く者はいない。寅次郎君、君こそ我が国の救世主だ。

寅次郎　もったいないお言葉です。

弟子１　いつ出発するつもりだ？

寅次郎　風がなければ今夜にでも。

象山　そうか。ではこれは餞別の本だ。（風呂敷包みを渡す）この何倍もの洋書を持って帰りなさい。

寅次郎　はい。ありがとうございます。

音楽。

<M-7 "Dawn of Tomorrow"　「明日の空」>

寅次郎　♪海を渡ろう　世界はすぐそこ
回り回って　世界を見よう
波は高く
潮は速く
嵐吹き荒れても
鳴りやまぬ　胸の鼓動
目に浮かぶ　明日の空

暗闇に船が浮かび、乗り込む寅次郎。

象山 ♪（主旋律）

なぜ惹かれる　この若者に
なぜ高まる　未来の想い
心の奥に　秘めた望み
千里の道を　越えて行け
何も持たず　力もなく
遙か漕ぎ出しても
鳴りやまぬ　君の歌
（弟子達　Woo- Woo-）
目に浮かぶ　明日の空
（弟子達　Woo-　Woo-）
目に浮かぶ　明日の空

寅次郎 ♪（オブリガート）

海の向こう　見え隠れ
波間に　揺れる
未来の　想い燃えて
月影に　託す
望みを　照らして
輝く
明日の空

暗転。空砲。

<M-8 "Yankee Doodle" 「ヤンキードゥドゥル」>

「ヤンキードゥドゥル」（日本名は「アルプス一万尺」）が聞こえてくる。黒人、白人の男女が、コミカルなタップダンスを踊る。ここは米戦艦だ。

羽織の侍が登場。侍の動きは次第に激しくなり、見事に踊る。曲が終わると侍とアメリカ人が手を取り合って喜び、退場。

提督と通訳が登場。

通訳　またまた大成功でしたね。

ペリー　今度はシャンペンを何ケース持って行かれた？

通訳　さあ。軽く十ケースはいかれたんじゃないですか？

ペリー　ほんとによく飲む奴らだなあ。

通訳　人の酒はうまいそうです。

ペリー　してやられた。今度こそ日本酒を飲んでみようと思ってたのに。

通訳　またしてものりのいい奉行がいましたね？

ペリー　うん。野蛮人は苦しめるより楽しませた方がやりやすい。アフリカやメキシコでもそうだった。最初は脅して、後で楽しませてやる。

通訳　しかし西洋をよく知るものもいるようです。先ほどもひげの男が近づいてきて、いきなり「写真をとらせろ」なんて言うのです。

ペリー　この国にカメラがあるのか？

通訳　それどころか、その男は電信機も作っていると言ってました。

ペリー　信じられん。アメリカでもカメラを作れるものが何人いるか。

通訳　幕府の役人より民間の方がましなようです。

船員が入ってくる。

船員　申し上げます。ただいま、小舟で漂流している男を捕らえました。我が国へ亡命したいと言っているようです。

ペリー　亡命だと？

通訳　私が話を聞いてみましょう。連れてきなさい。

船員が寅次郎を連れてくる。

船員　この男です。

通訳　君はこの船がどういう船かわかってるのか？

寅次郎　もちろんです。ペリー提督のアメリカ艦隊旗艦パウアタン号です。僕をアメリカに連れて行っていただきたいのです。

通訳　刀をさしているところを見ると、君は侍か？

寅次郎　そうです。僕は自分の無知を知り、アメリカで学びたいと思っています。

通訳　ほう。しかし、この国の法律では外国に行けないのではないのか？

寅次郎　その通り。だからあなた方は、まさに天の恵みです。海の向こうの世界を学ばせてください。

ペリー　（通訳に）なんと言ってる？

通訳　アメリカに行って学問をしたいようです。

寅次郎　どうかお願いします。

通訳　それ、重そうだな。まさか爆弾じゃないだろうな。

寅次郎　これは我が国の貴重な本です。（本を見せる）僕がアメリカを知りたいように、我が国を知りたいアメリカ人もいるのではないかと思いまして。

通訳　なるほど。お前はアメリカがどんな国か知っているのか？

寅次郎　ヨーロッパから自由と理想と夢を求めた人々がたどり着いた国で、チャンスの国だと聞いております。

通訳　よく知っているな。しかし、たとえアメリカに行けても、どうやって戻ってくる？

寅次郎　苦労はもとより覚悟の上です。アメリカを知り、西洋を学べるなら命は惜しくありません。

通訳　（ペリーに）死ぬ気で来ていると言ってます。

ペリー　すばらしい。この寒空に本だけ抱えてくるとは。

通訳　どうせ口先だけです。未開人ほど大げさな表現を使いたがるのです。

寅次郎　今なんと言われた？

通訳　お？　少しは英語がわかるのか？

寅次郎　言葉はわからずとも腹は読めます。僕の言葉をお疑いか？

通訳　ならばどうする？

寅次郎　僕の勝手な願いは別にして、嘘つきの国民だと思われては面目ございません。僕は役職もないただの浪人ですが、これでもこの国を救う覚悟でここにきました。その覚悟を疑われては、国を疑われたも同然です。僕の言葉に嘘偽りがあるかどうか、とくとご覧あれ！

寅次郎、脇差しを抜き、切腹しようとする。通訳は慌ててそれを止めに入る。

通訳　まて。

ペリー　いったい何のまねだ。

寅次郎　お離しください。口ほどにもない国民とおめおめ汚名を着せられるくらいなら、この場で見事腹かっさばき、僕の覚悟をご覧頂きたい。

ペリー　わかった。十分にわかったから、刀を収めてくれ。

通訳　私が悪かった。私の言ったことは取り消します。

寅次郎　ありがとうございます。わかっていただけたのですね？

ペリー　何という国だ。この向学心といい、この肝の据わり方といい。

通訳　侮っていると大変なことになりそうですね。

ペリー　まったく。これまでいろんな国を回ってきたが、こんなことは初めてだ。

寅次郎　（土下座して）どうか僕の願いをお聞き届けください。

ペリー　どうやら始めて本物の侍に出会ったようだな。頭を上げてください。

ペリー、寅次郎の手をとって立たせる。

ペリー　私はシーボルトの著作を読み、この国のことを調べました。

寅次郎　シーボルトを知っているのですか？

ペリー　残念ながら、これまで彼が書いたような本物の侍には会えなかった。しかし、今ようやく彼の言ったことが嘘ではないとわかりました。命がけで学ぼうとする進取の精神と我が身をも省みない勇気を持つ若者がいれば、この国の未来はきっと明るい。

寅次郎　心が通じたのですね？

ペリー　君はすばらしい！（寅次郎を強く抱きしめる。寅次郎は苦しそう）

通訳　提督、お気をつけください。もしかするとこれは罠かもしれません。

ペリー　罠？

通訳　そうです。我々がこの国の法律を守るかどうか試すため、幕府が送り込んできたのかもしれません。

ペリー　この男が幕府の手先というのか？

音楽。

<M-9　"Dawn of Tomorrow"（Reprise）　「明日の空」>

寅次郎　♪海を渡ろう　世界はすぐそこ

回り回って　世界を見よう
波は高く　潮は速く

通訳　ええ。この男を連れて行くと、それを理由に条約破棄を言い出すつもりかも。

寅次郎　♪嵐吹き荒れても

ペリー　しかし、嘘をついている目には見えんが。

寅次郎　♪鳴りやまぬ　胸の鼓動
目に浮かぶ　明日の空

ＢＧ。

通訳　今はようやく和親条約を締結したところです。トラブルに巻き込まれてはいけません。

ペリー　それはそうだが……。

寅次郎　♪
海を渡ろう

ペリー　♪（ハーモニー）
なぜ惹かれる　この若者に

世界はすぐそこ
回り回って　世界を見よう
波は高く　潮は速く
嵐吹き荒れても
鳴りやまぬ
胸の鼓動
目に浮かぶ　明日の空

なぜ高まる　未来の想い
心の奥に　秘めた望み
千里の道を越えてゆけ
何も持たず　力もなく
遙か漕ぎ出しても

通訳　「今は時期が悪すぎます」
通訳　「情に流されてはいけません」

通訳　（音楽を断ち切るように）残念だが、無理だ。

ペリー　申し訳ない。

ペリー、通訳去る。舞台暗くなり、舞台前面の一部だけに四角く明かりが落ちる。寅次郎、崩れるように座り込む。重い扉が閉められる音。一瞬の闇。すぐに明かりがつくと、崩れた寅次郎を取り囲む形で、弟子達が座っている。

寅次郎　このあと僕は下田の海岸に連れ戻され、自首しました。
利助　え？　自首したんですか？
寅次郎　こそこそするのは性に合いませんから。後で知ったことですが、ペリーが僕の罪を軽くするように奉行所に要請してくれたそうです。
高杉　先生！
寅次郎　はい？
高杉　俺は……決めました。
寅次郎　どうしました？　今目覚めたような顔をして。
高杉　いつか必ずアメリカに行きます。
寅次郎　頼みましたよ。

槍を持った山縣が登場。山縣、槍を振り回し、かけ声をかけながら動いた後で、床を打ち鳴らす。

山縣　寅次郎先生はご在宅でござりまするか。
久坂　おお、山縣じゃないか。
山縣　おお、久坂さん、先日はどうも。
久坂　先生、この山縣は、何もわかってませんが、槍だけはうまい男です。

山縣　その通り。何もわかってござりませんので、ぜひお教え願いまする。

高杉　なんか、だんだん弟子の質が変わってきたなあ。

山縣　（槍で床を打つ）

寅次郎　山縣さんはなぜここへ？

山縣　久坂さんに教わって来たのであります。世間の噂ではここに来れば御推挙していただけると。

寅次郎　士官のことですか？

山縣　左様でございます！

寅次郎　しかし、そういうことは……

山縣　（突然土下座して）お願いいたしまする。こちらでは、商人でも武士にしていただけると伺っております。命を賭けて働きますので、どうかよろしくお願いしまする。

寅次郎　手をあげてください。僕はまもなく江戸に送られるかもしれませんが、ここにいる皆さんが一緒に学んでくれるでしょう。

山縣　ありがとうございまする。

利助　それにしても何のために幕府は先生を呼びつけるんでしょうか？

寅次郎　大したことはないでしょう。僕は何もしてませんから。

久坂　しかしずっと萩に幽閉していたのに、今更江戸に来いというのもおかし

な話しです。もしや先生を見せしめにする罠かも。

高杉　先生、一緒に逃げませんか。

寅次郎　僕は江戸ですることがあります。

高杉　何をお考えです？

寅次郎　裁きの場で幕吏を諭してみます。外国やコレラより危険なのは無能な政治です。国の危機を誠を尽くして説明しようと思います。

久坂　そんなことをすれば間違いなく死罪です。気は確かですか？

寅次郎　確かでないといいのですが。

久坂　またそんなことを。

山縣　あの、江戸に行かれるのでしたら、早速稽古、いや学問をつけてくださりませ。お願い申し上げます！

利助　まあ、あんまり堅くならないで。

銀　そうだよ。塾ではみんなタタミイワシのように接してください。

高杉　魚から離れろ。

利助　その槍、普通のより長いですね。

山縣　短くもなります。（槍を短くする）

銀　折りたたみ式なんですか。

山縣　はい。（一気に伸ばしてみる）これが自慢です。

高杉　お前、それで何を突くつもりだ？

山縣　残念ながらそれがわかりません。正直、父親のような倉庫番で一生終えるのは嫌だと思い槍を学びましたが、こんなものを振り回している時代じゃないのはわかってます。でも、何を振り回せばよいかわからず、ここに参ったのです。

高杉　気に入った。実は俺もそうだ。

山縣　え？　そうなんですか。しかし高杉家は立派な家柄ですから、やがては藩の要職に付かれるのでしょう？

高杉　お前、そんな人生が面白いと思うか？

利助　家柄がよいのも大変なんですよ。この塾も、危険思想を吹き込んでるからって高杉家では出入り禁止なんだって。

高杉　バカ。そんなちっぽけな話しをしてんじゃねえよ。

亀太郎　よしできた。これで完成だ！

久坂　お、ついに描けたか？

亀太郎　ずいぶんかかった。先生、ここにお言葉をいただけませんか。

亀太郎が筆と硯を渡し、寅次郎がなにやら書き始める。

文　すごい！　本物の兄上みたい。

利助　さすが亀太郎、ほんとに生き写しだ。

銀　今にも喋りそうだ。

寅次郎　……（字を書き亀太郎に）これでいいですか？

亀太郎　（寅次郎の書を見て）死して後やむ。どういう意味です？

寅次郎　死んだ後でようやくやめる、という意味です。

久坂　すごみのある言葉ですね。

寅次郎　そうありたいです。

利助　あれ？　亀太郎、お前、先生の肖像画以外にこんな絵も描いてたのか？。

亀太郎　ああ。先生が描かせてくださらないときに描いてたんだ。こっちもまもなく完成だ。（筆を動かす）

銀　なんだい、その絵は？　棒きれみたいに見えるが。

亀太郎　棒きれだよ。これで全員そろう。

利助　全員？　もしかして、これは俺たちの絵か？

亀太郎　ああ。戯れ絵だ。

銀　戯れ絵ってなんだ？

利助　なるほど。塾生の様子を漫画のように描いているんだよ。

銀　じゃあ、今のこの棒は？

利助　槍の山縣だ。

銀　てことはこの暴れている牛が高杉さんで、この立派な坊さんが久坂さんか？

文　で、この金魚が私？

利助　でしょうね。それにこの筆を持っている亀が亀太郎だろう？

亀太郎　そうだ。

銀　俺は？

亀太郎　ここに、ほら。

銀　おお、こいつはいいなあ。広げてみよう。利助さん、そっち持って。

利助　よっしゃ。

<M-10　"Intermission"　「幕間」>

三畳ばかりある大きな絵が広げられると、舞台は暗転。バンドの演奏があって客電がつき、休憩。

第二幕

第一幕の終わりと同じ重い扉が閉められる音。薄暗く明かりがつく。ここは監獄だ。寅次郎が入ってくると背後に男女数人が様子をうかがい、隙を狙っている。

寅次郎　（背後の人に気づいて）はじまして。どうも。突然伺いまして、ご迷惑をおかけします。松の村の……

背後の人々が「ヤー！」と突然大声を出して寅次郎に襲いかかり、身ぐるみをはがす。牢名主の声が響く。

牢名主　静かにしろ！　殺すんなら静かにやるんだ。

囚人達がさっと闇に消え、ぼろをまとった寅次郎が残る。

牢名主　おい新入り。

声も出ない寅次郎の背中を囚人が棒で叩く。

囚人１　お前のことだ！（小突く）

寅次郎　はい。

牢名主　金はあるか？

寅次郎　いいえ。

囚人２　ここがどこだかわかってるんだろ？　地獄の沙汰も金次第、ましてここは牢の中、身分や器量より金がものを言うんだ。お前、親戚か誰かいるだろ？

寅次郎　はい。

囚人１　じゃ金を送ってもらえ。それまでは飯抜きだ。

寅次郎　わかりました。

牢名主　お前、何をした？　盗みか、殺しか？

寅次郎　いいえ。黒船に乗り込んできました。

囚人３　クロフネ！　あの、赤鬼の船か？

囚人１　あいつら、人を喰うんじゃないのか？

寅次郎　西洋人は人を喰いません。

囚人３　しかし何だってそんな大それたことをしでかしたんだ？

寅次郎　世界を見るためです。アメリカに行き、世界を見て回るため黒船に乗り込みました。

囚人２　外国に行くのは御法度だって知ってるだろ？

寅次郎　はい。知っております。

囚人１　とんでもねえワルだな。そんな大それたことをやらかしやがって。

囚人３　しかしよく死罪にならなかったな。

寅次郎　はい。江戸の伝馬町に送られ、この萩の牢屋に送られました。

牢名主　おい、出しな。

寅次郎　はい？

牢名主　俺の目を甘く見るんじゃないぞ。お前そこに何を隠している？　そのぼろの中にあるものを出せ。

囚人１　（取り上げる）本ですぜ。何が書いてある？

寅次郎　この国のことです。返してください。

囚人、寅次郎を払いのけ、牢名主に本を放り投げて渡す。

囚人１　そんなに大事か？

寅次郎　もちろんです。それはこれまで僕が読んだ本から大事な箇所を抜き書

きしたものです。

牢名主　ふーん。お前が書いたのか。ケツをふいたら真っ黒になりそうだな。

寅次郎　返してください。お願いします。

囚人２　俺はなあ、お前みたいに思い上がった奴が大嫌いなんだ。そんなもの、ばらばらにしてやりましょうぜ。

寅次郎　やめなさい。その中にはこの国の未来が書かれている。

牢名主　未来だと？

寅次郎　そこには政治、経済、社会の構想が書いてある。これからの国創りに欠かせない知識です。

囚人２　偉そうな口の利き方をしやがって。囚人のくせに、夢みたいなことばっかり言ってんじゃねえよ。

寅次郎　夢じゃありません。現実の話です。なぜ我が国では多くの人が飢えているのに、外国人は金銀を持ち帰れるのか、不思議ではありませんか？世の中を変えれば、みんな胸を張って食べてゆけるようになるはずだ。

囚人３　みんなが飢えないように出来るって言うのか？

寅次郎　そうです。そのためにはまず外国を知らなければならない。

牢名主　ふうん。本の中身を話してみろ。面白ければ返してやる。

寅次郎　わかりました。ではまず開国した我が国の様子をご覧頂きましょう。

舞台前面の明かりが消え、舞台奥に三人が歌いながら机を運んでくる。
机の上には金貨と銀貨の山。金貨の前に老中、銀貨の前に上海、その間にアメリカが立つ。

<M-11 "Global Standard" 「貿易を始めよう」>

アメリカ ♪貿易を始めよう
上海 貿易を始めよう
老中 貿易を始めよう
アメリカ 貿易を始めよう
上海 貿易を始めよう
老中 貿易を始めよう
アメリカ みんな仲良く
上海 儲けよう
老中 まずは試しで
アメリカ 貿易を始めよう
上海 貿易を始めよう

老中　貿易を始めよう

音楽小さくなる。

アメリカ　（ポケットから五枚の銀貨を取り出し）おい、島国、この銀を金と換えてくれ。

老中　銀五枚には金一枚でしたね？

アメリカ　そうだ、それが国際相場だ。

老中　（金貨の山から一枚だけ取り）じゃあ、金一枚。

アメリカ　ありがとよ。……おい上海、この金を銀に換えてくれ。

上海　では相場通りで金一枚と銀一五枚の交換でいいですね？

アメリカ　ああ。ありがとよ。おい、島国！

老中　なんだ？

アメリカ　また銀と金を交換してくれ。今度は銀が一五枚ある。

老中　じゃあ、金三枚だな。

アメリカ　そうだ。おい、上海。この金三枚を銀に換えてくれ。

上海　はい、じゃあ銀四五枚ね。

アメリカ　おい島国！　銀四五枚だ。

老中　じゃあ、金九枚。

アメリカ　おい上海！　金九枚だ。

上海　はい、銀一三五枚ね。

アメリカ　島国！　銀貨一三五枚だ。

老中　金二七枚。

アメリカ　上海、金二七枚。

上海　銀四〇五枚。

アメリカ　島国、銀四〇五枚。

老中　金八一枚……お前、なんかずるしてないか？

アメリカ　全然。おい上海。

上海　（机の背後に隠してあった銀の固まりを出して）はい、一二一五枚。

老中　なんで銀五枚が一二一五枚になってるんだ？

アメリカ　それが為替ってもんさ。羨ましかったら、経済の勉強をするんだな。

老中　ち、もうこんな事はやめだ。

アメリカ　ほら、君にだけ銀五枚をやる。これで最初の倍になっただろ？

老中　……ありがとう。

牢名主　（大声で）ふざけんじゃねえよ！

舞台奥暗転。つい先ほどの歌『貿易を始めよう』と同じ曲で歌詞を変えて『学問を始めよう』を牢名主、囚人、久子と寅次郎が歌い出す。

<M-11' "Global Study" 「学問を始めよう」>

牢名主 ♪学問を始めよう
寅次郎 学問を始めよう
囚人 学問を始めよう
寅次郎 みんな仲良く
牢名主 始めよう
囚人 平和を願って
牢名主 学問を始めよう
囚人 学問を始めよう
寅次郎 学問を始めよう

やがて音楽は激しくなりクネクネロボットダンスで本を回し読みしている。本を取り出し、ページをめくり、読んで驚き、読んで笑い、読んで泣く姿がダンスになっている。だんだんと速度が速くなり、倒れ

る。

音楽が終わり明かりがつくと書き物をしている寅次郎が残る。囚人の一人、久子登場。

久子　何を書いておられるのですか？

寅次郎　牢屋の改革案です。囚人が書くと説得力がありますから。

久子　誰に宛てて書いてられるのですか。

寅次郎　藩侯です。

久子　お殿様に？　そんなことをして首が飛びませんか？

寅次郎　悪くすれば飛ぶでしょう。しかし中身に納得いただければここも改善されます。

久子　どうしてそんな危ないことをなさるのです？

寅次郎　おとなしくしていても良くなりませんから。たとえばあなたのような女性が男と同じ牢屋にいると不都合ですよね？

久子　それはもちろん。

寅次郎　囚人だから不自由は仕方がないと放置されていますが、牢屋は囚人に反省させるだけでなく生き直したいと思わせる場所であるべきです。アメリカの制度を見習って、教育の場にすべきなのです。

久子　アメリカの牢屋のことまでご存じなんですね。

寅次郎　本に書いてありますから

久子　なるほど。いつも夜遅くまで読書されてますものね。みんな先生はどうして眠くならないのだろうって言ってます。

寅次郎　それは蚊のおかげです。

久子　蚊？

寅次郎　眠くなったら懐に蚊を入れるのです。

久子　かゆそうですね。

寅次郎　それは仕方ありません。蚊なんですから。

久子　そうですよね。でもかゆいと本も読めないんじゃないですか？

寅次郎　実は子供の頃、読書の最中に蚊に噛まれたところを掻いていたら叔父にひっぱたかれました。

久子　どうしてです？

寅次郎　書を読むのは公に尽くすためだが、かゆい所を掻くのは私の心だ。世の中の不正の大半は公の中に私を持ち込むことで生じる、だから本を読むときには私を一切持ち込むな、とね。

久子　なんだかものすごいおじさんですね。

寅次郎　でも訓練の甲斐あって、今は蚊と仲良く読書できるようになりました。

久子　すごい気合い。だからあんなにたくさんの本をお読みになれるんですね。

寅次郎　ほんの六〇〇冊ほどです。全部家族と知人の差し入れです。

久子　きっといい奥様なのでしょうね。

寅次郎　いえ、僕は独身です。差し入れてくれるのは父や兄や叔父、それに友人達です。

久子　あら？　そうなんですか。女子供は邪魔ですか？

寅次郎　そういうわけではないのですが、正直言うと女性の前だと上がってしまって、どう接していいのかわからんのです。

久子　今は？

寅次郎　今？　あ、そうですね。今は普通ですね。

久子　囚人なんか、女じゃありませんものね。

寅次郎　そんなことありません。久子さんは美しいです。

久子　お上手ですね。とても女が苦手と思えない。

寅次郎　いや、いつもはこうじゃないんですよ。変だな。久子さんは結婚されてるのですか？

久子　夫に先立たれ、親族にこの牢に入れられました。

寅次郎　親族の方がどうして？

久子　身分の低い者を家に通したせいです。

寅次郎　それだけで牢に入れられたのですか？

久子　ええ。身分違いの者と親しくすると格式が守れないと。

寅次郎　ひどい話だ。

久子　言われてすぐにやめれば良かったのですが、一度仲良くなった人たちを追い返せずにいると、不埒であると牢に入れられました。馬鹿な話でしょ？

寅次郎　久子さん、あなたは素晴らしい。

久子　え？

寅次郎　あなたは徳川幕府の身分制度を否定されたのですね？

久子　いえ、そんな大それたことは……

寅次郎　そもそも我が国の身分制度は徳川家という一家の安泰のために、国中の人を縛り付けたものだ。そんなものにこだわっていてはこの国は滅びる。そういうことでしょ？

久子　いえ、何もそこまで……

寅次郎　（手を取って）あなたのような人がこれからの日本を作るのです。

久子　私はただの囚人です。人の役に立つことなどありません。

寅次郎　あります。現に僕はあなたの話に勇気づけられました。身分や格式より大事なのはその人間だ。たとえばアメリカでは能力さえあれば誰でも

大統領になれる。そういう国になるにはあなたのような人こそ必要です。

久子　そんな風にお褒めいただくとは思いもよりませんでした。それに先生はアメリカ嫌いかと思っておりました。

寅次郎　内緒ですがほんとは好きなんです。アメリカのことを考えるとなぜかワクワクしてきます。

久子　でも攘夷っておっしゃってましたよね？

寅次郎　それはアメリカが大砲で脅すからです。科学技術や社会制度を学びながら、アメリカを打ち払うのが目標です。ま、ちょっと矛盾も感じますが。

久子　先生のそういうところ、好きです。

寅次郎　え？

久子　好きなんだか嫌いなんだかわからないって、いい感じだと思いません？

寅次郎　そうかもしれませんね。

久子　私も好きになったかもしれません。

寅次郎　アメリカをですか？

久子　いえ、この牢屋です。

寅次郎　ああ、そっち。

久子　そう、そっち。

寅次郎　なるほど。……なぜですか？

久子　少しはいいこともありますから。先生はいかが？

寅次郎　僕も好きになったのかもしれません。ゆっくりとお話しできますものね。

いつのまにか牢名主が二人のごく近くにまで接近している。

牢名主　わたしと？

寅次郎　ああ、どうも牢名主さん。

牢名主　じゃまだったかな？

寅次郎　いえ、全然。

牢名主　なんか、いい雰囲気だったね？

寅次郎　いえ、別に。どうかしましたか？

牢名主　ちょっと相談があるんだ。

寅次郎　何でしょう？

牢名主　牢屋番の福川のことなんだが。

寅次郎　福川さんがどうかされましたか？

牢名主　いやね、あいつ先生の講義を盗み聞きしてたようで、先生の弟子にし

てもらいたいと、ぬかしやがって。いや、いくら何でも看守が囚人の弟子じゃまずいだろうと言ったんだが、どうしてもと言い張りやがってね。

寅次郎　共に学んでいただけるならどなたでも歓迎です。

牢名主　ありがてえ。後で顔を出させるからよろしく頼まあ。

寅次郎　こちらこそ。しかし、ここは少々手狭になってきました。

牢名主　そのことで、さっき藩のお偉方が話してたよ。

寅次郎　御家老ですか？

牢名主　ああ。どうやら先生はここから出されて自宅に幽閉ってことになりそうだ。

寅次郎　それは確かですか？

牢名主　間違いねえよ。なにしろ、先生の講義が始まると、外の連中が押しかけてくるんだから仕方ないだろ。まさか牢屋を学校にするわけにもいかないから、自宅で塾をやれってことだそうだ。

久子　よかったですね。

寅次郎　ありがとうございました。

寅次郎を残し暗転。音楽。塾の机や掛け軸などを運び入れながら歌う弟子達。

<M-12 "The World Over"（Reprise）「広い世界」>

寅次郎 ♪広い世界はどこにある
久坂 ロンドン
利助 北京
高杉 エルサレム
寅次郎 この世界見渡すなら
久坂 ここが柱とみたてよう
利助 いつでもない時に
高杉 どこでもない所に
全員 見つけよう青い空

寅次郎 ♪面白きことはどこにある
銀 学校
利助 劇場
久坂 夜の街
高杉 面白きこともなき世に

利助　面白かれと祈るなら
久坂　いつでもない時に
銀　どこでもない所に
全員　見つけよう青い空

利助　先生、私と銀ちゃんのことでご報告があります。
寅次郎　何かあったのですか？
利助　先生の御推挙のおかげで銀ちゃんと私が士分にとりあげられることになりました。
寅次郎　それはよかった。おめでとう。
利助　ありがとうございます。
高杉　よかったなあ。
久坂　おめでとう。
山縣　ほんとによかった。（泣く）
高杉　お前が泣くことはないだろ。
銀　俺みたいなのが武士だなんて、ハマチがブリになったようなもんです。
久坂　魚のままじゃん。
銀　違いない。

一同、笑う。

銀　それにしてもどうして俺みたいなのが武士になれたんでしょう？　先生は藩のお偉方に知り合いがいらっしゃるのですか。

寅次郎　いいえ。僕はただの罪人です。

久坂　どうしてこうなったか知りたいか？

銀　そりゃもう。

利助　私も知りたいです。

久坂　まず先生は『外蕃通略』をお書きになり、西洋と日本の関係を論じられた。そして『西洋歩兵論』をお書きになり、西洋の組織的な歩兵制度の利点を論じられた。

高杉　我が国の軍組織は三百年前から変わっていない。武器を輸入してもそれを使える組織を作らなければ意味がない。

銀　なるほど。

久坂　わかったのか？

銀　半分。

利助　で、それが私たちと関係があるんですか？

高杉　おおありだ。先生はその書物を政務役の周布さんに送られ、それを藩主がお読みになった。藩主はもっと読ませよと仰り、先生は『狂夫の言』を書かれた。

利助　そこに何が書かれてたのです？

高杉　強い国を作るには人が何より大事、身分を越えて有能な人材を登用すべし、と。

銀　まさかその有能な人材が？

久坂　お前達だよ。

利助　これは大変だ。私はてっきり先生にコネでもあるのかと思ってました。

寅次郎　残念ながら私はただの罪人です。それに武士とか農民とかいう身分制度自体がなくなればいいと思っています。

久坂　しかし今の世の中、武士でなければ政治に口も出せない。

寅次郎　だから武士の世を終わらせるため武士になるのです。しっかり頼みますよ。

利助　はい。

高杉　というわけだから、武士になったことをナンパのネタになんかするなよ。

利助　止めてください、先生の前で。そんなこと言うなら、酔っぱらって野良犬を斬ったことをバラしますよ。

高杉　バカ。何言ってんだよ。

久坂　お前ら、そんなことしてるのか。

利助　いや、私じゃありません。（高杉を指さして）こっちですよ、こっち。

久坂　なぜ止めなかったのだ？

利助　止められませんよ、暴れ牛は。

久坂　ふたりとも、そんなことをしていると天罰が下るぞ。

遠くかすかに空砲の音。

久坂　何だ？　今のは？

亀太郎走って登場。

亀太郎　黒船だ！　萩に黒船が現れたぞ。

利助　こんなところに？

亀太郎　御城下は上へ下への大騒ぎ。家財道具持って逃げ出す者、小舟で沖にこぎ出す者、念仏を唱え出す者と、何が何やらわからない様子だ。

山縣　ご心配めさるな、拙者がこの槍で……

久坂　（山縣を無視して）ここから見えるのか？

亀太郎　高台に行こう。あそこからなら見える。

全員、ひしゃくやら刀やら手当たり次第に手にとって、塾から出て遠くを見やる。望遠鏡を回し見る。

寅次郎　ここにも来ましたね。

亀太郎　あれだ。あの煙を吐いている船だ。

利助　でかい。千石船の何倍もある。

銀　まるで鯨だ。

亀太郎　鯨と言うより、島だな。島が煙を噴きながら動いているみたいだ。

利助　メートル法で全長五〇メートルぐらいですか。

久坂　排水量は千トンだな。

高杉　先生が乗られたのとどちらが大きいですか？

寅次郎　あれはまだ小型です。ペリーのサスケハナ号は全長七八メートル、排水量二千五百トンでした。

利助　あれで小型か。

山縣　しかし本当に鉄が水に浮かぶんだな。

久坂　だから浮力があるって教えてやったろ？

山縣　そうだった。だがこの目で見ても信じられん。

亀太郎　見ろよ、もうあんなところだ。でかいのにすげえ速さだ。

銀　メカジキ並みだな。

山縣　（望遠鏡を見て）望遠鏡で見ても信じられん。

高杉　乗ってみてえな。

利助　気持ちいいでしょうね。

久坂　そんな日が来るかもしれんぞ。

利助　ほんとに？

久坂　ああ。すでに宇和島藩は蒸気船の試作品を作ったらしい。

山縣　乗れば信じられるかな？

久坂　多分な。

亀太郎　あら？　なんか大砲が全部こっちに向いてますよ。

銀　ほんとだ。あれでドカンとやられたら、まずいでしょうね。

利助　そりゃまずいだろ。

大砲の音が大きく響く。

山縣　信じられん！

久坂　みんな頭を低くしろ！

寅次郎以外、慌てて伏せる。

寅次郎　心配いりません。あれはただの空砲です。

銀　なんだ、空砲ですか。

高杉　脅かしやがって。

寅次郎　あれは礼砲といって西洋の習慣です。彼らに戦う意志はない。

銀　しかしたたく意志がないなら、なぜ我が国に戦艦を送り込んでくるんですか？

久坂　武力で脅かすのが西洋人のやり方だ。隙を見せたら島の一つも占領する気かもしれん。

利助　先日結ばれた下田条約では、外国人が我が国で人を殺しても捕らえらないことになっています。

銀　てことは、あの大砲を本当にぶっ放してもお咎めなしですか？

久坂　そういうことになる。

銀　じゃ、やっぱりあぶないじゃない。あんなのがうろうろしてたら漁にも

行けやしない。

利助　周布さんは何と言っている？　藩はどう対処するつもりだ？

亀太郎　幕府の意向を確かめないと動けないって。

高杉　藩も幕府もあるもんか。大砲を向けられて黙っていては長州藩の名折れだ。

亀太郎　あの大砲さえなければ、長州の気概を見せてやるんだが。

高杉　船から降りたところを襲えばいい。

利助　船から降りたところ？

高杉　食糧や燃料補給のために上陸したところを襲うんだ。中国周りできたとしたら、下関あたりで補給するんじゃないのか？

利助　確かに地上戦になればこちらに利がある。どうです？

久坂　そうすれば、藩や幕府も目が覚めるかもしれんな。

山縣　いっちょ、やったりますか？

高杉　ようし、やる気のあるやつは刀を抜け！

弟子達　おー！（刀を抜く）

寅次郎　おやめなさい。戦うなら、ペリーが来たときにやるべきだった。条約まで結んだ後では遅すぎます。今手を出せば、藩はあなた方を始末し、アメリカはそれを口実に戦争を始めるかもしれない。それでもよろし

いか？

利助　それじゃあ外国船が我が物顔でうろついていても、放っておけとおっしゃるんですか？

寅次郎　いいじゃありませんか。船が海を走るのに何の不思議がありますか。

高杉　先生の言葉とも思えません。攘夷の志はどうなるんです？

寅次郎　そんな刀や槍を振り回し、野良犬を襲っているようで国が変わりますか！

音楽。

寅次郎　国が危機に陥ったとき、一番大切なのはなんですか？

久坂　大義名分ですか？

寅次郎　いいえ。

山縣　武力？

寅次郎　いいえ。

利助　お金？

銀　援軍？

亀太郎　技術力？

高杉　戦術？

寅次郎　一番大事なのはそれを使う人間です。どんな条件がそろおうと、人がいなければ何も出来ない。残念ながら今の皆さんは気概をすり減らしているだけだ。

高杉　どうすればいいのです？

寅次郎　まず刀を納めなさい。そんなものを振り回す時代じゃありません。そして浩然（こうぜん）の気を起こすのです。

亀太郎　浩然の気？

利助　浩然の気？

寅次郎　それは何者にも動じない悠然たる心構えです。刀に手をかける者は刀に滅び、言葉巧みに人を操らんとする者は言葉に滅びる。

山縣　簡単に言うとどういうことでしょう？

寅次郎　今皆さんは刀を抜いて気勢を上げていたが、国を変えるのは喧嘩をしに行くのとはわけが違う。命を捨てる覚悟があるなら、女性のように優しく振る舞うのです。

利助　女性のように？

寅次郎　そう、女性のように。望み高ければ頭を下げ、力満ちれば穏やかに、狂おしく静かに見つめ、恐れればやさしく。それが浩然の気というもの

です。簡単に激するようではいざというときに必ず失敗する。真の気魄を持つには慎み深く。

高杉　慎み深く。

寅次郎　穏やかに。

久坂　穏やかに。

寅次郎　そうすれば物事の本質が見えてきます。今本当に憂うべきは、外国船ではない。目先の損得に右往左往し、天命を知らぬ幕府や藩です。

利助　天命？

寅次郎　人々の幸せを祈る気持ちです。天命を知らぬ国など、守る価値はありません。

山縣　先生、まさか我が国が滅んでもよいと？

寅次郎　価値がなければ滅びるのは当然です。徳川家のためだけにあるような国の体制が、どれほど人を不幸にしてきたことか。たとえば今、日本に科学技術が輸入され、ペリーの黒船に勝るとも劣らぬ武器を手に出来ればそれですべてが解決されるのでしょうか。僕はそうは思わない。今の体制では誰が武器を手にしても、民衆の生活は良くなるどころか悪くなる一方だ。東北の飢饉で何万人が飢え死にし、佐渡の金山で人々がどんな状態で働かされているかを知れば、この国が根本的に間違っているこ

とがすぐにわかるはずです。この国を滅ぼしたくないなら、国を変える
しかない。

利助　国を変えるとは？

寅次郎　国の経済を立て直し、生まれや身分に関わりなく、働く者が報われ、弱者をいたわり、誇りを持てる国を造る。それにはどんな国の体制がよいのか、そこまで皆さんは考えていますか？　先の先まで冷静に見通さずに事を起こせば、外国の思うつぼ、内戦状態につけ込まれて分断されてしまう。本当に国を変える覚悟なら、人を説得しなければならない。人を説得するには、明るい未来を語れなければならない。明るい未来を語るには明日を信じてなければならない。もし皆さんが本当に明日を信じられるなら、一緒に幕府を倒しましょう。

高杉　革命か。

<M-14　"Splendor in the Wind"　「風の輝き」>

寅次郎　♪　川を上ろう　流れかき分け
光の中　夢の果てまで
川を下ろう　海を目指して

弟子達　風を背に　流れ捕らえて
寅次郎　望み高く
弟子達　望み高く
寅次郎　穏やかに
弟子達　穏やかに
寅次郎　狂おしく
弟子達　狂おしく
寅次郎　静かに
弟子達　静かに
寅次郎　漕ぎだそう
弟子達　漕ぎだそう
寅次郎　新しい
弟子達　新しい
寅次郎　世界へ
弟子達　世界へ
寅次郎　世界へ

寅次郎　♪
川を上ろう　流れかき分け
光の中　夢の果てまで
川を下ろう　海を目指して
風を背に　流れ捕らえて

弟子達　望み高く
寅次郎　望み高く
弟子達　穏やかに
寅次郎　穏やかに
弟子達　恐れれば
寅次郎　やさしく
弟子達　帆柱立て
寅次郎　帆柱立て
弟子達　自由な
寅次郎　自由な
弟子達　明日へ
寅次郎　明日へ

寅次郎　川を上ろう　流れかき分け
全員　川を下ろう　海を目指して
自由な（自由な　自由な　自由な）　明日へ

寅次郎　幸い僕たちは孤独ではない。江戸や京都にも同志はいます。高杉君と

利助君は江戸へ、久坂君と亀太郎君は京都へ行き、熱い思いを語ってください。

久坂　喜んで参ります。

高杉　どんとこいだ。

寅次郎　草叢（くさむら）から人々がわき上がるように、心を尽くし革命を説くのです。

高杉・利助　では江戸へ！

久坂・亀太郎　では京へ！

高杉、利助、久坂、亀太郎、去る。

歌が終わる頃、ぶらりと長州藩の政務役周布が登場。

周布　危ない歌だな。

銀　これは周布さん。

山縣　ちょうど良いところにおいでになった。あの黒船をどうするおつもりですか？

周布　どうもこうもあんな化け物を相手にできるか。

銀　上陸してきたらどうするつもりです？

周布　薪と食糧を渡してなんとか引き取らせる。それが幕府の方針だ。

山縣　腰抜け外交ですな。

周布　言葉を控えよ。隠密が長州の動向を探っているんだぞ。

寅次郎　藩の政務役としては気になりますか。

周布　もちろんだ。だから今革命などといって煽られては困る。今日はその事を言いに来たのだ。

寅次郎　僕は争乱を煽っているわけではありません。

周布　それはわかっている。しかし、幕府は締め付けを謀っている。京都の動きを警戒し、朝廷を彦根に移すという噂もあるくらいだ。

寅次郎　それは根も葉もない噂です。江戸の友人に確かめましたから。

周布　問題は朝廷じゃなく幕府の方だ。幕府は京都の志士たちを一斉に検挙し始め、浪人達を京都から追い出した。さっきのような歌を歌われては、藩が困る。

寅次郎　黙って幕府に従っていれば、我が国は植民地です。

周布　幕府に口出しはできん。私にどうしろというのだ？

寅次郎　僕に藩の大砲を貸してくださいませんか。

周布　大砲など、何に使う？

寅次郎　有志の者たちと上京し、老中に御意見申しあげるつもりです。

周布　馬鹿を言え。そんなことをしたらわが藩は御取りつぶしだ。

寅次郎　藩の心配より、国のことを考えてください。今幕府を止めないと、本当に取り返しがつかない。あの通商条約のせいで、これから先どれほど我が国が苦しむことになるか。

周布　わかってくれ。何事も一足飛びにはいかんのだ。

寅次郎　地道にやっては千年かかる。時に及んでまさに志を無駄にしてはいけない。己を尽くして天に聴くのが道というものです。

周布　そういう危ない話はやめろ。さもないと君を捕らえることになる。

棒や刺又を持った役人達が舞台を取り囲むように登場。

銀　周布さん、どういうことです？

周布　今話したとおりだ。

銀　先生が何をしたというのです？　私たちはここで学問をしていただけです。

周布　それが藩を危機に陥れているんだ。寅次郎君、今動いても何の得にもならない。幕府は本気だ。状況を読め。

寅次郎　状況を読み、周りの顔色を伺っている間に、一番大事なことを忘れていませんか。三十人もいれば革命の先駆けとなれる。

周布　頼むからわしに手荒い真似をさせんでくれ。今は時を待て。

寅次郎　時勢を見て他力を頼んでいる間は誰も助けてくれない。我が身を捨て、家を捨て、藩を捨てた言葉だけが、人を動かすのです。誠あらばすなわち生き、誠なくんばすなわち死せん。

周布　もういい。捕らえるぞ。（寅次郎たちから離れる））

山縣　（槍を構えて）アイヤ！　宝蔵院流の我が槍をごらんあれ！

銀　（ひしゃくを構えて泣きながら）ええ？　闘うんですか？

山縣　泣くんじゃない。今引き下がったら、俺の士官も千年かかる。

寅次郎　やめましょう。ここで死んでは犬死にです。

役人達　御用だ！

役人たち、かけ声と共に丸棒で寅次郎をとらえる。暗転。舞台奥に、オランダ、ロシア、アメリカと幕府の老中が登場。老中以外は衣装の一部に国旗が付いている。音楽。

<M-15 "Sign Sign Sign"「サインサインサイン」>

ロシア　♪サインを

アメリカ　サインを
オランダ　サインを
三人　サインを
ロシア　サインを
アメリカ　サインを
オランダ　サインを
ロシア　サインを
アメリカ　サインを
オランダ　サインを
三人　サインを
老中　ちょっと待ってくれ。
アメリカ　♪サインをしないとイギリスが来る
ロシア　イギリスが来るとフランスも来る
オランダ　だからオランダとサイン
アメリカ　だからアメリカとサイン
ロシア　だからロシアとサイン
三人　サイン！　サイン！　サイン！
老中　待った！　（音楽止まる。）まだ準備ができてない。

オランダ　アメリカが来る一年以上も前から警告してきたのに、あなた方は何をしてたんですか？

老中　ぶらかし戦術。

オランダ　なんですかそれ？

老中　いや、あーでもないこーでもないと言ってればごまかせるかと。

オランダ　国際政治を甘く見ては困ります。

ロシア　ロシアにもアメリカと同じ条約を結ぶという約束でしたね？

老中　そういえばそんな風な……。

ロシア　国境線も画定しましょう。（紙を見せて）こんな感じでどう？

老中　え？　なんで樺太や千島列島がロシア領土なんだ？

ロシア　当然でしょ？

老中　馬鹿な。間宮がどんな苦労をして調査をしたか……。

アメリカ　言い忘れてたが、この国の南にあるボニン諸島はアメリカのものだからな。

老中　ボニン諸島とはどこだ？

アメリカ　（地図を見せて）ここだよ。承認のサインをくれ。

老中　そこは小笠原諸島だ。そんなところがアメリカ領のわけないだろ。

オランダ　オランダにもアメリカと同じ条約を結んでもらいますよ。

老中　だからそれは…

音楽。

ロシア　♪さあ、サインを
アメリカ　サインを
オランダ　サインを
三人　サイン　サイン　サイン
アメリカ　サインをしないとイギリスが来る。
ロシア　イギリスが来るとフランスも来る。
オランダ　だからオランダとサイン
アメリカ　だからアメリカとサイン
ロシア　だからロシアとサイン
三人　サイン！　サイン！　サイン！
老中　ウ！

音楽突然止まる。各国に取り囲まれて身動きできなかった老中が倒れる。ロシア、アメリカ、オランダが倒れた老中を抱え上げる。

三人　♪サイン！　サイン！　サイン！

各国代表退場。

牢獄。久子と寅次郎。寅次郎は読んでいた手紙を放り出す。

久子　先生、お食事は？

寅次郎　（声が暗い）結構です。

久子　そんなに思い詰められてはお体に触ります。せめてかゆなどお召し上がりください。

寅次郎　ありがとう。でも生きていてもどうせ役に立ちませんから。

久子　今度は何をなさったのですか？

寅次郎　する前にここに入れられました。

久子　何もしてないのにまた牢に入れられたのですか。

寅次郎　ええ。どうも僕は不器用でいけません。脱藩しても国のために働けず、アメリカに行こうとしても、囚われて親兄弟に迷惑をかけただけ。この度も兵を挙げようとしましたが、誰も付いてきてくれませんでした。

久子　何をなさるおつもりでした？

寅次郎　革命です。老中を撃とうと同志を募り、藩を説得しました。

久子　まあ。大それたこと。それは難しそうですね。

寅次郎　ええ。僕も藩はあてにしていませんでした。しかし、京都や江戸にいる塾生達にまで反対されるとは思わなかった。昨日みんなが連名で自重するようにと手紙をよこしてきました。

久子　高杉さんや久坂さんもですか。

寅次郎　ええ。久坂君は元々思い切りが悪いが、高杉君は立ってくれると思ってたのですが。

久子　皆さん事情がおありなんでしょう。遠くにいるとこちらの様子もわからないでしょうし。

寅次郎　皆話は聞いてくれても、いざとなると行動を共にはしてくれない。きっと僕の学問が浅薄なのでしょう。

久子　うまくいかないときもありますよ。

寅次郎　……このままでは国が滅びます。

久子　先生には珍しく悲観的ですね？

寅次郎　ええ。危機は間近に迫っていますから。

牢名主がいつの間にか寅次郎の後ろにいる。

牢名主　何が間近に迫ってるって？

寅次郎　うわ！　びっくりした。相変わらず、突然出ますね。

牢名主　先生、お勤めご苦労様です。先生の上申書のおかげで、なんと俺も牢から出されることになったよ。

寅次郎　おお、それはめでたい。

牢名主　俺だけじゃなく、十一人いた囚人のうち七人も釈放だ。

寅次郎　久子さんも出られるのですか？

久子　いいえ。家族が引き取りを拒否しましたので。

寅次郎　そうでしたか。

久子　いいんです。こうして先生にもお会いできましたから。

牢名主　まあ、そのうち出られるって。俺は習字を教える仕事までもらったよ。

寅次郎　それは良かった。牢名主さんは達筆だから。

牢名主　何もかも先生のおかげだ。ありがとうよ。

寅次郎　何かあったら会いに来てください。

牢名主　そうしたいところだが、先生の江戸送りは明日だそうだ。

寅次郎　おお、決まりましたか。

牢名主　だけど今回の取り調べは厳しいぞ。逃げるなら今だぜ。

寅次郎　逃げるなんてとんでもない。実は思うところがあり、江戸送りを楽しみにしてたのです。

牢名主　そうかい？　じゃあまあ先生も身体に気をつけてな。

牢名主、退場。

久子　江戸送りとはどんな風なのですか？

寅次郎　縛り上げられてかごに乗せられます。

久子　なんということ。

寅次郎　罪人だから仕方ありません。

久子　何だかお声が明るいですね？　江戸送りが楽しみだと仰ってましたが、何が待っているのです？

寅次郎　奉行達の吟味です。そこで自分の言葉を直接奉行にぶつけられる。僕にも最後の機会が巡ってきたようです。

久子　そんなことをして大丈夫ですか？

寅次郎　孟子の言葉に、誠を尽くせば動かぬ人は未だこれなしとあります。僕は学問を初めて二〇年、もう三〇になりますが未だこの言葉がわからない。誠を尽くせば奉行の心も動かせるのか、今一度江戸で試します。

久子　先生はもうお帰りにならないおつもりですね。

寅次郎　そうなるかもしれません。

久子　これをお持ちください。（手ぬぐいを渡す）

寅次郎　ありがとう。道中汗を拭かせてもらいます。

久子　塀の向こうに季節外れの梅が咲いております。ここからは手に取れませんが、きっと雨に濡れております。

寅次郎　あなたの声、忘れません。

寅次郎去る。音楽。

<M-16 "Unseasonable Bloom"　「帰り花」>

久子　♪名もない人たちと
語り合えて
何もないところから
愛が生まれるなら
恐れることがあるだろうか
悲しむことがあるだろうか

あなたは七たび生き返る
私の中に生き返る

会えない人たちを
胸にいだいて
信じる言葉から
明日が生まれるなら
忘れることがあるだろうか
消え去ることがあるだろうか
あなたは七たび生き返る
私の中に生き返る
私の中に生き返る
生き返る

明るくなると、舞台下で大目付と勘定奉行と町奉行が大老に頭を下げている。

大老　各々方、お気楽に。

勘定奉行・町奉行　はは。

大老　近頃京では御政道に口を挟むのが大流行だというが、どなたか京都の様子を御存知か？

大目付　恐れながら薩長の浪士たちの振る舞いは目に余ります。世間知らずの公家をかつぎ、幕府を公然と批判しています。

大老　薩摩、長州はもともと外様。徳川家を守るのは我らしかない。

大目付　見せしめのため、志士たちを締め上げますか。

大老　調べはついているのか？

大目付　はい。橋本左内、安島帯刀（あじまたてわき）、頼三樹三郎、鵜飼幸吉、梅田雲浜、これらの者は皆、幕府に謀反をたくらむ者でございます。さらに長州の吉田寅次郎と申す者、力量もあり、言葉巧みに人心を惑わしております。

大老　幕府の威信を守るため、断固たる処置をとらねばなりません。取り調べの上、厳罰に処しなさい。

町奉行　橋本左内

大老　死罪

勘定奉行　安島帯刀（あじまたてわき）

大老　切腹

大目付　鵜飼幸吉

大老　獄門
町奉行　梅田雲浜
大老　死罪
大目付　吉田寅次郎
大老　死罪

暗転。
舞台中央の四角い部分にだけ照明があたり、そこに寅次郎がひとり。かなり弱っている様子だ。ここは牢獄だ。獄中の寅次郎を高杉が牢の外から尋ねる。

高杉　先生。
寅次郎　おお、地獄に仏とはこのことだ。よくぞここまでいらっしゃった。
高杉　たとえお話しくださらなくともそのお顔を見れば幕吏にどのような仕打ちをされたか、すぐにわかります。けれども今はお体を気遣う暇もなくお命の心配をせねばなりません。今夜この牢に火を放ちます。私が手引きしますから騒ぎに紛れて逃げてください。
寅次郎　ありがとう。でも僕は言葉で人を動かせるかやってみます。

高杉　言葉が通じる相手じゃありません。すでに梅田殿も橋本殿も殺されてます。

寅次郎　聞いています。僕も死んでみせねばならないのです。

高杉　死んでみせるとはどういうことです？

寅次郎　革命の話、あれは本気でした。

高杉　わかっております。

寅次郎　しかし誰も僕に賛成してくれなかった。

高杉　我々の気概が足りなかったのです。

寅次郎　いえ、僕の言葉が虚しかったのです。ただ、もし僕が幕府に殺されたら、倒幕の言葉も真実味を帯びてきませんか。

高杉　まさか最初からそのおつもりだったのですか。

寅次郎　今この国に必要なのは恐れながら天朝でも幕府でも藩でもない。我が身一つを擲（なげう）つ覚悟を持った普通の人々です。これが最後の賭です。

高杉　先生は命が惜しくないのですか。

寅次郎　もちろん惜しいです。けれども三〇才の命が惜しければ百才の命も惜しいでしょう。何年生きてもこれで足りたということはない。僕の人生は失敗の連続、何一つうまくいかなかった。だがもし誰かが僕の志を受け継いでくれたら、僕の人生も意味があったということです。

高杉　僕は先生なしで何をすればいいのかわかりません。

寅次郎　一〇年もせぬうちに藩はあなたを必要とします。いたずらに時を過ごさず、この世の何を楽しむか、考えてください。

高杉　楽しむのですか？

寅次郎　はい。なんぞ腹のいえることをして死なないと、成物（じょうぶつ）できませんぞ。最後までありがとう。

高杉が消えるのと入れ替わり、舞台奥に勘定奉行たち登場。

大目付　おもてを上げい。松本村の寅次郎、その方、京都の梅田雲浜と謀（はかりごと）をしたであろう？

寅次郎　そんなことは不可能です。僕は幽閉されていましたから。

大目付　しかしここにお前の手紙がある。

寅次郎　覚えはございません。

勘定奉行　嘘を言うとためにならんぞ。

寅次郎　雲浜など笑止千万。どうせはじめから死罪と決まっているのでしょう？

大目付　なんと？

寅次郎　手間を省きましょう。勘定奉行殿、五十歩百歩の話を御存知か？

勘定奉行　五十歩も百歩も逃げることに変わりはないというあの話か？

寅次郎　はい。その後に孟子はこう述べています。人民が飢え死にしているのに放置するなら、それは政治が殺したも同然だと。政治は悪くない、寒さのせいだというのなら、人を殺しておいて剣が悪いというようなものだと。

勘定奉行　何が言いたい？

寅次郎　外国人の買い占めのせいで、この数ヶ月で物価が数倍に跳ね上がり、民衆の生活は困窮を極めている。この元凶は幕府が締結した通商条約に他ならない。さらにまた、アメリカ船がもたらしたコレラが日本中に広がっている。

町奉行　これ！　ここをどこと心得る。罪人の分際で御政道に口出しするとは。

寅次郎　江戸だけでも何十万人もの死者が出ても無策のまま。これでも政治は悪くありませんか。

町奉行　黙れ、黙れ。御政道に誤りはない。公儀を憚らず不届きの至り。これ以上取り調べの必要はない。長州浪人吉田寅次郎、即刻死罪を申しつける。引ったて。

寅次郎　もはやナポレオンでもたたき起こし、自由を唱えて進軍せねば腹悶癒（ふくもんいや）

し難し。

暗くなり奉行たちは消え、黒子が白装束を寅次郎に着せる。歌の間に斬首の用意がなされる。久子、久坂、高杉、利助が歌いながら一人ずつ闇に浮かび上がる。

<M-17 "Unseasonable Bloom"（Reprise） 「帰り花」>

久子 ♪名もない人たちと
語り合えて
何もないところから
愛が生まれるなら
恐れることがあるだろうか
悲しむことがあるだろうか

寅次郎をとらえていたライトが絞り込まれ、暗闇の中、寅次郎は首だけが浮かんでいるように見え、その首がゆらゆらと高く上ってゆく。花吹雪が舞う。

あなたは七たび生き返る
私の中に生き返る

全員　恐れることがあるだろうか
悲しむことがあるだろうか
あなたは七たび生き返る
私の中に生き返る

突然寅次郎の顔が闇に消え、他の全員の顔が悲しみの表情のうちに徐々に消えてゆく。入れ替わり手紙を読んでいる象山が浮かび上がる。

象山　「佐久間先生、伏して願わくばお教えください。幕府諸侯のいずれを頼みとし、どこから国創りを始めるべきか。そして人の死に場所はどこにあるべきか。どうかその答えをこの手紙を持たせた者たちにお教えください。僕は進退これにきわまりましたが、彼らは僕の心です。彼らの生きる姿が僕の生きる姿です。」

明るくなると象山宅。象山、高杉、利助が座っている。

象山　これはいつ書かれたのですか？

高杉　処刑前の獄中です。

利助　幕吏はご遺体の下着まで引きはがしていました。

象山　むごいことを。

高杉　我々はこれから大老の首を取りに行きます。

象山　待ちなさい。命を粗末にするな。

高杉　これでは先生は無駄死にだ。僕はそれが我慢ならない。

象山　君には彼の声が聞こえませんか？　彼が戦ったのは外国の圧力と幕藩体制そのものだ。仇を討ちたかったら、外国も幕府もひっくり返す覚悟をしなさい。

利助　何をしろと仰るのです？

象山　そもそも彼は何をしようとして捕らえられましたか？

高杉　それは海外を見ようと……

象山　それです。まず海外を見てきなさい。彼が生きていれば今頃間違いなく行ってます。我が国はいずれ西洋と戦うことになり、そして必ず負ける。しかし問題は負けた後だ。

高杉　負けて後がありますか？

象山　これを見よ！

象山、いきなりカメラを二人に向けてストロボを炊く。驚く二人。

象山　このカメラを見なさい。これは私が作ったが、西洋人を真似たにすぎぬ。真似るだけでは彼らに勝てん。君たちは西洋人にできないことを考え出せ。気が遠くなるほどの時間がかかるだろうが、それが君たちに残された仕事だ。寅次郎の志を継ぐのなら、寅次郎より先を見よ。遠く遠く見渡して彼の魂を運んでゆけ。

高杉　どこまで行けばよろしいですか？

象山　目指すはイギリスだ。イギリスはすでに我が国の貿易の大半を独占し、幕府や薩摩とも通じている。奴らがいかに巧妙か知りたければ、上海を見よ。港にはイギリスの商船や軍艦が数千隻も碇泊し、街にはイギリス人の商館が城郭のごとく続いているという。

三人が消える同時に、周布と久坂が浮かび上がる。

周布　萩から江戸までどうたどっても一ヶ月はかかる。その萩のさらにはずれの片田舎に幽閉されて、国を変えようなどと普通思うか？

久坂　思わないでしょうね。

周布　ところがあいつは思った。そして長州を変えてしまった。しかもあいつは藩の役人でも何でもない。ただの罪人で実家に幽閉されてたんだ。それなのに牢屋を学校に変え、百姓を武士に仕立て、囚人を教師にした。若者たちは熱に浮かされて幕府や外国のことを語り出し、藩の重臣や殿様までが尊王や攘夷と言い出した。

久坂　私たちが眠っている間に先生は学問され、藩の重臣が美酒佳肴（かこう）に舌鼓をうっている頃、先生は詩を吟じながら打ち首への廊下を歩かれた。

周布　しかし、なぜたった一人の若者でこうも藩が変わったのだ？　今や江戸でも京都でも長州が幕府と戦うという噂で持ちきりだ。長州藩が維新の拠点になっている。

久坂　気に入りませんか？

周布　いいや。わしも熱に浮かされたひとりだ。

音楽。離れた場所に亀太郎、銀も浮かび上がる。

<M-18 "No one but the Moon"　「月よりほかに」>

久坂　♪花は落ち
亀太郎　鳥は啼き
銀　日傾き
周布　夢　はかなく消え

音楽転調し激しくなる。

久坂　血になく聲は有明の　（剣を抜く）
亀太郎　月よりほかに（剣を抜く）
全員　聞くものぞなき（剣を抜く）

弟子達、剣を手にダンスで殺陣。スローモーションで刀を振り下ろし、素早く移動。何度も虚空を切る。老中たちが浮かび上がる。音楽、続いている。

町奉行　申し上げます。長州が外国船を砲撃しました。

老中　なんだと？

町奉行　下関海峡を通過中のフランス、オランダ、アメリカの船をめがけて砲弾を撃ち込んだ模様です。

老中　幕府をさしおいて勝手な真似を。被害の状況は？

老中、町奉行消える。入れ替わってすぐに英提督と通訳が浮かび上がる。

通訳　各国の船はかなり被害を受けているようです。

英提督　イギリスの船は？

通訳　大丈夫です。しかし下関海峡が封鎖されては長崎貿易もままならず、対日貿易の３０パーセントがストップです。

英提督　トゥー・バッド。

通訳　しかもゆゆしきことに長州は幕府に砲撃の許可をもらっているそうです。

英提督　なんだと？　我々とは通商条約を結びながら一方では攻撃を許可したのか。

通訳　そうです。問題はもはや長州だけではありません。幕府も朝廷も急速に排外的になっています。今朝、幕府は横浜港を閉鎖すると通告してきま

した。放っておくとまた鎖国に逆戻りです。

英提督　そんな勝手はさせんぞ。そういうことなら長州を徹底的に叩いて我々の力を思い知らせてやる。

通訳　それがいいでしょう。下関は海上交通の要、いわば日本の香港です。あそこを拠点にできれば、この国を手に入れたも同然です。

英提督　なるほど。しかし大義名分が要るな。

通訳　その点はご心配なく。被害を受けたアメリカやオランダと連合艦隊を構成すれば国際的にも非難されません。今はアメリカもオランダも国内問題で手一杯。日本にかまっている暇はありませんから名前だけ借りればいいのです。後はフランスさえ黙らせれば我々が主導権を取れます。

英提督　パーフェクト。では中国にいる我が艦隊を呼び寄せろ。この国にとどめを刺す。

先の久坂達と同じ激しい曲が聞こえてくる。

英提督　↑ Get up to your feet

通訳　Be on your mettle for justice

英提督　End up the isolation

通訳　Build up the world trade

英提督　For the glory of Britain

二人　Get up to your feet

Get up to your feet

Get up　Get up

別の場所に老中と大目付が浮かび上がる。音楽は続いている。

大目付　申し上げます。イギリスを始めとする連合艦隊が長州征伐に向かいました。

老中　何？

大目付　まもなく下関に到着する見込みです。

老中　外国に先を越されてなるものか。幕府の力を見せるのだ。我々も長州に向かうぞ！

大目付　イギリスと戦うのですか？

老中　いや。これを機に長州をつぶすんだ。

♪血になく聲は有明の

大目付　月よりほかに（剣を抜く）

二人　聞くものぞなき（剣を抜く）

英提督　♪End up the isolation

通訳　Build up the world trade

英提督　For the glory of Britain

全員　Get up to your feet

Get up to your feet

Get up　Get up　Get up

久坂　♪花は落ち

亀太郎　鳥は啼き

銀　日傾き

周布　夢　はかなく消え

別の闇に久坂、亀太郎、周布、象山が浮かび上がり、突然、何本もの槍が頭上に落ち、地面に突き刺さった槍の間で四人ともシルエットになり凍り付く。爆弾の破裂音が聞こえると同時に舞台赤く染まり暗転。牢獄の中、一人高杉がいる。利助が高杉を訪ねて登場。

利助　お久しぶりです。

高杉　おお。

利助　どうしたんです、こんな牢屋の中で。上海で何かしでかしたのですか？

高杉　何もしてないさ。それよりなんでお前がここにいる？　しばらくイギリスじゃなかったのか？

利助　そのはずだったのですが、タイムズっていう新聞に出てたんですよ。イギリスが長州を攻めるって。それで慌てて帰ってきたのです。

高杉　そうか。いよいよイギリスが来るか。

利助　何暢気なこと言ってるんですか。どうしてやめさせなかったのです？　イギリス相手に戦争なんて無茶にもほどがある。

高杉　止めたよ。口先だけの攘夷なんて絵空事だってな。そしたら牢屋に入れられたんだ。

利助　そういうことか。

高杉　こうして閉じこめられている間に、わが藩は外国船を攻撃し、戦争を始めた。しかも京都を追い出され、蛤御門の変で壊滅状態だ。

利助　久坂さん達はたった数百人で数万の敵陣に切り込んだそうですね。

高杉　塾生の大半が死に、象山先生まで殺され、長州は孤立した。

利助　そして植民地への道を歩んでいます。

高杉　なに？　それはどういうことだ？

利助　下関に向かえばわかります。

高杉　下関に何がある？

利助　連合艦隊一七隻です。イギリスを主力に、フランス、オランダ、アメリカの四カ国の艦隊が下関を攻めています。敵の戦力は大砲二百門、兵員五千人。我が藩の兵は二千にすぎず、壇ノ浦、前田の砲台が破壊され、防戦一方です。このままでは下関は火の海です。

高杉　だから言わんこっちゃない。

利助　何とか戦争を終わらせ、講和条約を締結するため、高杉さんが全権大使に任ぜられました。

高杉　ちょっと待て。囚人の俺が全権大使だと？　藩のお偉方は何を考えてるんだ？

利助　我々以外に外国人と接したことのある人間がいないのです。

高杉　そりゃそうだろうが。

利助　相手は藩主を出せと言ってますが、藩主は病気のため代理として家老宍戸備前守の養子宍戸刑馬（ぎょうま）が交渉すると伝えてあります。

高杉　宍戸？　なんだそりゃ？

利助　家老と言わなきゃ相手が納得しませんし、高杉さんの悪名はイギリスにも聞こえています。

高杉　仕方ないなあ。じゃあ、宍戸になるか。

利助　私は交渉の下準備のためイギリス側と接触しましたが、講和しないなら下関を占領すると言ってました。

高杉　奴らの要求は？

利助　関門海峡の安全な通行と賠償金、それに領土です。

高杉　それをのんだら、上海や香港の二の枚だ。

利助　拒否すれば下関が火の海です。

高杉　植民地か火の海か。どう転んでも分の悪い交渉だ。

利助　しかも間近に幕府軍一五万も迫っています。

高杉　おいおい、幕府軍まで来てるのか。

利助　薩摩の西郷が二一藩を率いています。

高杉　西郷か。奴は久坂に心酔していたのにな。

利助　今やどの藩も幕府を恐れ、恭順の意を示しています。朝廷までも長州追討令を出し、何もかも長州のせいにするつもりです。

高杉　裏切りやがって。しかしまずいことになったなあ。賠償金に、領土、おまけに幕府軍か。

利助　この際、全面降伏しかないですね。

高杉　いや、長州が滅びればこの国は終わる。

利助　それじゃあ外国にでも逃げますか？

高杉　よし、芝居小屋に寄るぞ。

利助　え？　なんでまた？

高杉　衣装を調達するんだよ。それしか武器がない。

暗転。

激しい音楽と共に舞台奥から巨大な戦艦がせり出てくる。汽笛。この後のシーンはすべてこの戦艦の砲身の前で行われることになる。イギリスの水兵達が現れる。

<M-19　"Across the Five Continents"　「五つの大陸股にかけ」>

英提督　Across the five continents
Sail on the seven seas

英提督　Go ahead　Sail on

通訳　Go ahead　Sail on

水兵達　Go ahead　Sail on

Go ahead　Sail on

英提督　♪五つの大陸　股にかけ
通訳　七つの海を　乗り越えて
水兵（交代で）　森も　山も　海も　川も　空も　大地も
老いも　若きも　男も　女も　子供も　歴史も
通訳　夢も希望も愛も
英提督　歌さえも
水兵達　すべて
全員　すべて
我らのもの

Go ahead　Sail on
Go ahead　Sail on

（間奏）

英提督　取り舵一杯。全速前進！

汽笛大きく鳴り、水兵たち消える。
舞台中央に大きな机が浮かび上がる。上手側に英提督と通訳座っている。

通訳　前田砲台を占拠しました。上陸作戦成功です。
英提督　グッジョブ。手早く和議を結ぼう。あまり長引くと邪魔が入る。
通訳　ご心配なく。まもなく伊藤という通訳が藩の代表を連れて来るはずです。すでにこちらの要求は伝えてあります。
英提督　そうか。ここはいい土地だ。
通訳　ええ。瀬戸内海を通れば江戸への通行も楽ですし、中国もすぐそこです。
英提督　あの彦島をもらうぞ。

高杉と利助が登場。高杉は立て烏帽子に陣羽織という時代がかった扮装をしている。

通訳　これは伊藤さん、よくいらっしゃいました。こちらは宍戸備前守でいらっしゃいますね？

高杉　左様。

通訳　お待ちしていました。（椅子を勧めて）ようやく降伏する気になりましたね？

利助　降伏ではない。和平交渉です。

通訳　まあいいでしょう。しかし和平を言うなら、まず下関海峡の安全を保証していただきたい。

利助　わかった。そのように計らいましょう。

英提督　口先だけでは駄目だ。関門海峡の大砲を全部廃棄してもらいたい。

利助　我が藩に丸腰になれと言うのか？

通訳　平和に大砲は要らないでしょう。それともまだ大砲を撃つつもりですか？

利助　まさかの時の国防は必要です。

通訳　しかし誰に向けて大砲を撃つつもりです？　我々外国船以外に標的はないはずだ。この条項は不可欠で譲歩することは出来ない。

高杉　仕方がない。砲台はすべて廃棄しよう。

通訳　それから賠償金は三百万ドル。

利助　三百万ドル？　そんな大金、あるわけない。

通訳　長州は下関の町から砲撃してきた。この場合、国際法では、我々が下関

を焼き尽くしてもよいことになっている。下関の町の値段と思えば三百万ドルも安いものでしょう。

高杉　ならばそれを幕府に請求しろ。我々は幕府と朝廷の方針に従っただけだ。

通訳　幕府は関係ない。これは長州の戦争です。

高杉　そもそも戦争の賠償交渉は国家間で行うはずだ。これまでの戦争で一地方が国家に賠償したという前例があるのか。

通訳　（提督に）国際法を知っているようですね。

英提督　わかった。賠償金は幕府に請求する。しかし長州には担保を提供していただきたい。

利助　担保とは？

英提督　彦島だ。あの島を租借させて欲しい。

高杉　あれは我々のものではない。

通訳　あそこが長州領だということぐらい、調べはついてます。彦島を香港のようにしてさしあげる。

高杉　本当に我々の島ではないのだ。

通訳　では一体誰のものですか？

高杉　*夫れ、混元既に凝りて、気象未だ効れず。名も無く為も無し。誰れか其の形を知らむ……

通訳　ちょっと待て。何を言ってるんだ？

高杉　最初は命も物質もなかったが、天地が初めて分れ、三人の神が天地創造を始め、伊邪那岐、伊邪那美が万物の祖となったのだ。

通訳　そのイザナギとイザナミとは誰ですか？

高杉　我らの国の生みの親です。

英提督　いつの話だ？

高杉　ざっと一〇億年前。

通訳　そんな昔話より、あの島は誰のものだ？

高杉　アマテラスだ。

通訳　それはなにものですか？

高杉　あそこに見える太陽のことだ。

通訳　（英提督に）太陽のものだそうです。

英提督　ふざけるな！

高杉　ふざけてなどいない。あの島は太古の昔神々から祖先が預かったものだ。それを勝手に使うなど、神を恐れぬ冒涜だ。

通訳　神とは関係ない。これは政治だ。

高杉　祖先がいなければ我らはおらず、神々がおられねばこの国はない。太素（たいそ）は杳冥（えいめい）なれども、本教（ほんきょう）に因（よ）りて土（くに）を孕（はら）み島を産みし時を識り、……

英提督　もう結構。その呪文をやめなさい。下関を火の海にしてもいいんだぞ。

高杉　呪文とは何だ。我が国の歴史を馬鹿にしてただですむと思うな。長州には命知らずの志士が何万もいることを忘れるな。

通訳　文化の違いですね。

高杉　寔(まこと)に知る、鏡を懸け珠(たま)を吐きて、百王相続き、劒(つるぎ)を喫(か)み蛇(おろち)を切りて、万神蕃息(ばんそく)せしことを。

英提督　全く話にならん。（席を立つ）こんな小さな藩を相手にしても始まらん。相手は幕府だ。幕府からたっぷり賠償金を取り立ててやる。

英提督と通訳退場。

利助　見ましたか、あの真っ赤な顔！　なんと神話で撃退だ！　そのための衣装だったんですね！

高杉　ああ。あのまま何日でも続けてやるつもりだった。

利助　しかし危なかった。租借なんて事になったら、完全に植民地だ。

高杉　喜ぶのはまだ早い。俺たちはまだ、ほんの緒戦を生き抜いただけだ。これから先、俺たちは西洋人の銃を持ち、西洋人の科学を使って暮らしてゆくことになる。あっという間に西洋は俺たちの故郷も神話も飲み込む

だろう。奴らの奴隷になるか、新しい国を創れるか、それが運命の分かれ道だ。

利助　気が遠くなるような話ですね。

高杉　ゆっくり行こう。その前に片付けることは山ほどある。

高杉、烏帽子と陣羽織を脱ぐ。低く太鼓の音が響く。舞い散る雪。
四人の刺客があわただしく登場し、二人を取り囲む。

<M-20 "Kill Him"　「奴(やつ)」>

刺客１　高杉、伊藤、覚悟。

高杉　何者だ？

刺客１　長州のため、死んでもらうぞ。

高杉　チェ！　次々出てきやがるなあ。

利助　お前たち、何が望みだ？

刺客１　そのクビだ。幕府にたてついた責任をとって、おとなしく死ね。

高杉と利助に斬りかかる四人。高杉と利助は身軽に逃げるが、徐々に

追いつめられてゆく。もはやこれまでというところで高杉が懐からピストルを出し、一発撃つ。

高杉　ちょうどいい。上海で買った六連発を試したかったんだ。誰から撃とうか？　お前か？　それともそっちか？　撃たれたい奴は前に出ろ！

刺客1　引け！

四人の刺客去る。

利助　あいつらわが藩の者ですね。

高杉　藩の命令で動いている俺たちが何で狙われなきゃならん？

利助　邪魔なんですよ。家老たちの首と一緒に幕府に差し出すつもりでしょう。幕府は高杉を引き渡せと言ってるらしいですから。

高杉　へえ、この首にそんな値打ちがあるのか。

利助　長州、幕府、朝廷、イギリス。見渡す限り敵ばかりです。

高杉　大丈夫、計画は完璧だ。もはや割拠して、長州を独立国にするしかない。

利助　藩の正規軍は四千います。

高杉　まずはそれを打ち破ろう。

利助　それから幕府軍一五万。
高杉　それも打ち破る。
利助　そして最後に西洋人も？
高杉　追い出してやる。
利助　すばらしい。でも誰が？　誰がそれをやるんです？
高杉　わしとおぬしだ。
利助　たったふたりで？　気は確かですか？
高杉　確かでないといいのだが。
利助　なんですって？
二人　僕は狂人になりたいのです。

二人、顔を見合わせて笑う。
高杉、衣装を脱ぎ捨てると、中に鎧が見える。

利助　鎧を着込んでいたんですか。
高杉　もとよりそのつもりだ。
利助　実は私も。

利助も衣装を脱ぐと中に鎧を着込んでいる。

高杉　なかなかやるな。まずは奇兵隊を説得しよう。

利助　山縣もいますからね。塾生に声をかければ二、三十人は集まるでしょう。

高杉　まさかあいつの槍に、この国の運命を託すことになるとはな。

利助　行きましょう。

高杉　まず、奉行所を襲う。それから船を奪って一気に城まで駆け上がる。

利助　了解！

高杉、利助、一気にテーブルの上に駆け上がる。

高杉　今こそ存亡の時。まさに回天回運の策を立てんとす。親を捨て子を捨つる亦何ぞ悲しまん。一里行けば一里の忠を尽くし、二里行けば二里の義をあらわす。

利助　今たたなければ名が廃る。真があるなら今月今宵、あけて正月誰も来る。

二人が机から勢い良く飛び降りると共に音楽がなる。

<M-21 "Dawn of Tomorrow"（Reprise）　「明日の空」>

高杉　♪海を渡ろう　世界はすぐそこ
回り回って　世界を見よう
波は高く　潮は速く
嵐吹き荒れても
鳴りやまぬ　君の歌
目に浮かぶ　明日の空

利助　♪なぜ惹かれる　この男に
なぜ高まる　未来の想い
心の奥に　秘めた望み
千里の道を越えてゆけ
何も持たず　力もなく
遙か漕ぎだしても
鳴りやまぬ　君の歌
目に浮かぶ　明日の空

高杉・利助の背後に寅次郎、松陰、久坂、山縣、銀、ペリー、ペリー通訳、宮太郎、久子、文、象山の弟子１、弟子２、山田先生が遠くから二人を見つめるように浮かび上がる。

全員　♪海を渡ろう　世界はすぐそこ
回り回って　世界を見よう
波は高く　潮は速く
嵐吹き荒れても
鳴りやまぬ　君の歌
目に浮かぶ　明日の空

高杉、利助が剣を抜き、虚空を切る。
舞台に高杉と利助のシルエットを残し、突然闇。
様々な音楽が聞こえてくる。

〈了〉

＊『古事記』より引用

〈参考文献〉

『吉田松陰全集』（岩波書店）
『世に棲む日日』司馬遼太郎著（文春文庫）
『東行先生遺文』（民友社）
『ペルリ提督日本遠征記』（岩波書店）
『外交官の見た明治維新』アーネスト・サトウ著（岩波書店）
『江戸の旅人吉田松陰』海原徹著（ミネルヴァ書房）
『吉田松陰と松下村塾』海原徹著（ミネルヴァ書房）
『伊藤公全集』（昭和出版）
『幕末長州藩の攘夷戦争』古川薫著（中公新書）
『吉田松陰書簡集』（岩波書店）
『維新の先覚吉田松陰』（山口県教育会）
『高杉晋作と奇兵隊』（東行庵）